貝塚市埋蔵文化財調査報告第34集

津田遺跡発掘調査概要

1994．12．28

貝塚市教育委員会

津田遺跡発掘調査概要

1994. 12. 28

貝塚市教育委員会

はじめに

津田遺跡は、津田川左岸の段丘上の海岸部に面した遺跡であります。従前の調査例も乏しく、その内容について明確ではありません。

今回、本遺跡の歴史の一端を明らかにする機会に恵まれ、また本調査報告書として刊行するはこびとなりましたことは、過去の人々の暮らしを明らかにすることにおいて有意義なことと考えます。

本書の刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存・研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係者各位には多大なご理解、ご協力を頂き、末筆ではありますがここに深く感謝の意を表します。

平成6年12月28日

貝塚市教育委員会

教育長　福井昱彦

例　　言

1．本書は、貝塚市立貝塚病院の依頼により、大阪府貝塚市堀３丁目10－20番地他において実施した。病院改築工事に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2．調査は遺構確認調査を平成４年４月６日から４月10日にかけて、本格的発掘調査を平成５年１月16日から３月10日にかけて実施した。なお、内業調査については平成５年11月30日に終了した。

3．調査にあたっては病院改築室、建設部建築課より多大な理解と協力をいただいた。記して感謝の意を表す。

4．発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課、学芸員前川浩一、上野裕子が担当した。
　現地調査および本書作成にあたる諸作業については、下記の諸氏の参加を得て実施したものである。

赤星　崇	足立　涼子	石橋　孝子	大西　隆子	梶原　剛
木戸えり子	国本　純子	清水　久子	下中理絵子	辻ノさとみ
中辻　澄子	橋本さおり	堀内　計秀	南　明美	山本　一吉
山本　寿子	米子　千智			

5．本書の編集は上野が担当した。執筆は、第１章は前川が担当し、それ以外については上野が担当した。

6．遺物写真撮影は上野が行った。

7．出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会において保管している。

目　　次

はじめに
例　　言
目　　次　（本文目次、図版目次、挿図目次）

第１章　　調査に至る経過……1
第２章　　位置と環境……3
第３章　　調 査 成 果……5
　　1．調査の概要……5
　　2．基 本 層 序……6
　　3．検 出 遺 構……6
　　4．出 土 遺 物……16
第４章　　ま　と　め……23

図 版 目 次

図版１　検出遺構
　第１区全景

図版２　検出遺構
　第２区全景

図版３　検出遺構
　１．第１区全景
　２．第２区全景

図版４　検出遺構
　１．流　　路
　２．同　　上

図版５　検出遺構
　１．ＳＫ－２、３
　２．同　　上

図版６　検出遺構
　１．ＳＫ－３断面
　２．ＳＫ－４

図版７　検出遺構
　１．ＳＫ－５
　２．ＳＫ－５、６

図版８　検出遺構
　１．ＳＤ－13
　２．鋤　　溝

図版９　出土遺物
　ＳＫ－４（１、２、４、７）、ＳＫ－６（20）
　第３層（25、36）出土遺物

図版10　出土遺物
　第３層（23、34）、第１層（38～42、44）
　出土遺物

挿 図 目 次

図１　貝塚市遺跡分布図
図２　調査地位置図
図３　調査区地区割図
図４　調査地土層図
図５　第１区遺構配置図
図６　第２区遺構配置図
図７　ＳＫ－２
図８　ＳＫ－３
図９　ＳＫ－４、５、６、ＳＤ－13
図10　ＳＫ－４（１～７、12、15）
　　ＳＫ－５（８～11、13、14）
　　ＳＫ－６（16～20）出土遺物
図11　包含層第３層出土遺物
図12　包含層第１層出土遺物

第1章　調査に至る経過

貝塚市堀３丁目10－20他地内に所在する貝塚市立貝塚病院約17,000㎡の敷地内に病院改築整備計画が平成５～８年度事業としてもちあがり、平成４年４月１日付けにて、病院改築室より埋蔵文化財確認調査の依頼書が提出された。

開発予定地は周知の遺跡外であったが、周辺には貝塚寺内町遺跡、津田遺跡等が近接して位置するため、これらの遺跡とかかわりのある遺構等の存在が充分考えられる地域であった。

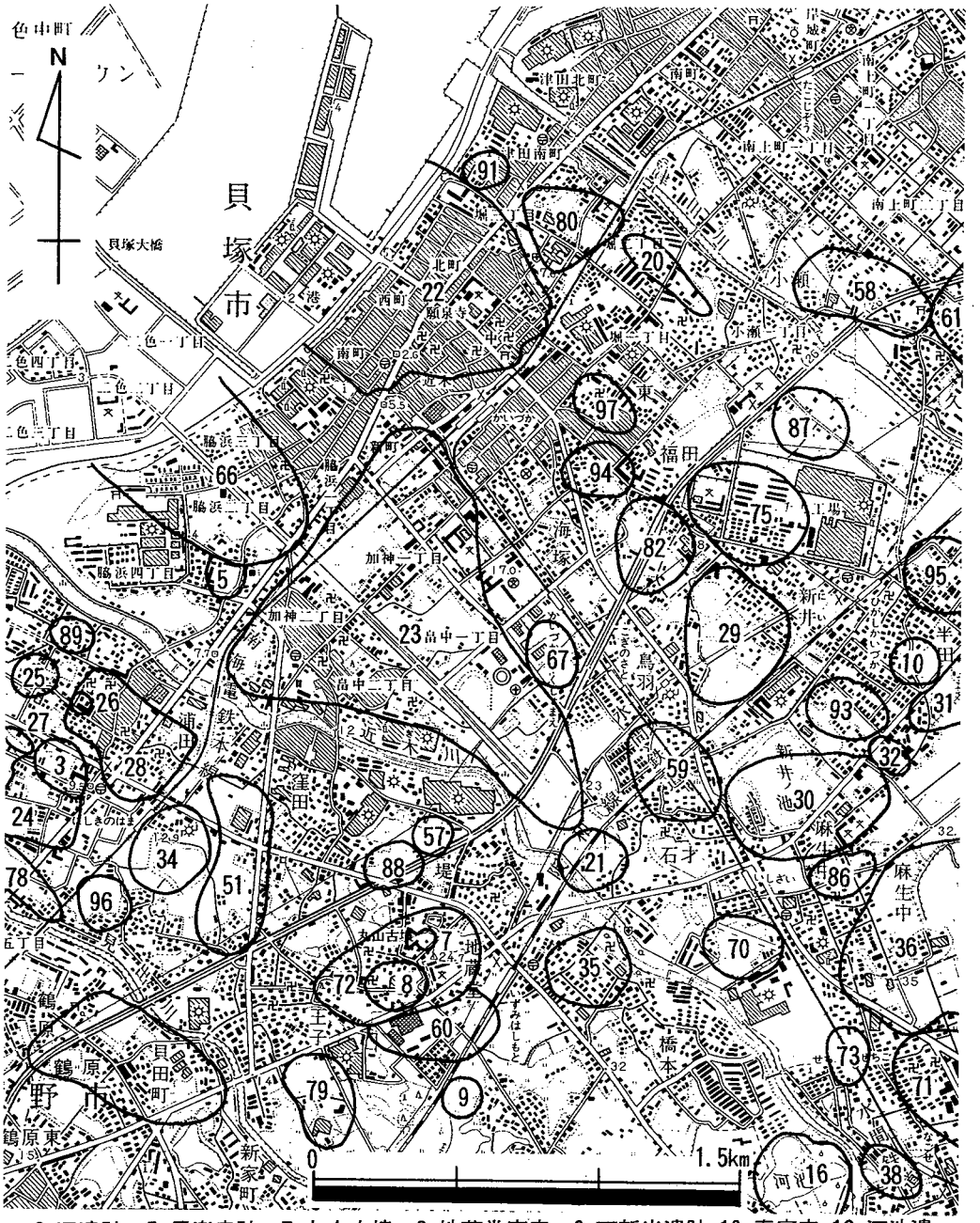
そこで、開発計画の実施に先立ち、病院改築室と貝塚市教育委員会との間で埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、遺構確認調査を実施したうえで、遺構の存在が明らかとなった場合は、本格的発掘調査を実施することの合意をみた。

遺構確認調査は開発計画に基づき、開発予定地内に10ケ所の調査区を設定し、平成４年４月６日から４月10日にかけて実施した。

調査では、調査地北東部に設定した３ケ所の調査区から、近世以前と考えられる遺構、遺物包含層を確認し、調査地南半部に設定した調査区では、遺構、遺物は確認できず、砂層、礫層が存在し河原状を呈していることが明らかとなった。

この結果をもとに、病院改築室に遺跡発見届出書の提出を求め、再度遺跡の取扱いについて協議を重ねた結果、開発行為によって破壊を受ける調査地北東部の２ケ所の建物部分約730㎡について本格的発掘調査を実施することの合意をみた。

発掘調査は、既設建物の解体を待って、平成５年１月16日より、同年３月10日までの約２ケ月をかけて実施した。



3. 沢遺跡　5. 長楽寺跡　7. 丸山古墳　8. 地蔵堂廃寺　9. 下新出遺跡 10. 秦廃寺 16. 河池遺跡 20. 堀遺跡 21. 橋本遺跡 22. 貝塚寺内町遺跡 23. 加治神前畠中遺跡 24. 明楽寺跡 25. 沢共同墓地遺跡 26. 沢西出遺跡 27. 沢海岸北遺跡 28. 沢城跡 29. 新井鳥羽遺跡 30. 新井ノ池遺跡 31. 半田遺跡 32. 麻生中遺跡 34. 澱池遺跡 35. 積善寺城跡 36. 清児遺跡 38. 高井天神廃寺・高井城跡 51. 窪田遺跡・窪田廃寺 57. 堤遺跡 58. 小瀬五所山遺跡 59. 石才遺跡 60. 王子遺跡 61. 土生遺跡 66. 脇浜遺跡 67. 今池遺跡 70. 石才南遺跡 71 名越遺跡 72. 地蔵堂遺跡 73. 名越西遺跡 75. 新井鳥羽北遺跡 78. 沢西遺跡 79. 王子西遺跡 80. 津田遺跡 82. 福田遺跡 86. 麻生中出口遺跡 87. 小瀬遺跡 88. 堤三宅遺跡 89. 沢新開遺跡 91. 堀新遺跡 93. 麻生中下代遺跡 94. 堀秋毛遺跡 95. 半田北遺跡 96. 沢老ノ塚遺跡 97. 東遺跡

図1　貝塚市遺跡分布図

第2章　位置と環境

津田遺跡は貝塚市の東を流れる津田川左岸に位置し、南北180m、東西350mにおよぶ中世～近世の集落跡、窯跡である。

調査地は津田川の浸蝕によってできた河成段丘の突端部に位置しており、調査地の北側より急に下がり、一段低い海岸部へと続いている。

日本近世窯業史には、寛永４年、京都より酒井庄太郎という工人が来て、堀新町で陶器製造を始めたという記述がある。この陶器の窯と推定される場所は、調査地の北を一段下がった旧26号線沿いにある。1990年、1991年にはその表採遺物が乾哲也、南川孝司、森村健一、渋谷高秀氏等によって紹介されている。

周辺の遺跡としては、西側に中世から近世にかけて願泉寺を中心に栄えた貝塚寺内町遺跡、縄文時代～江戸時代にかけての生産遺跡である脇浜遺跡、近年の調査で多くの遺構が発見され、特に飛鳥～奈良時代の良好な遺構が残っていることが判明した加治・神前・畠

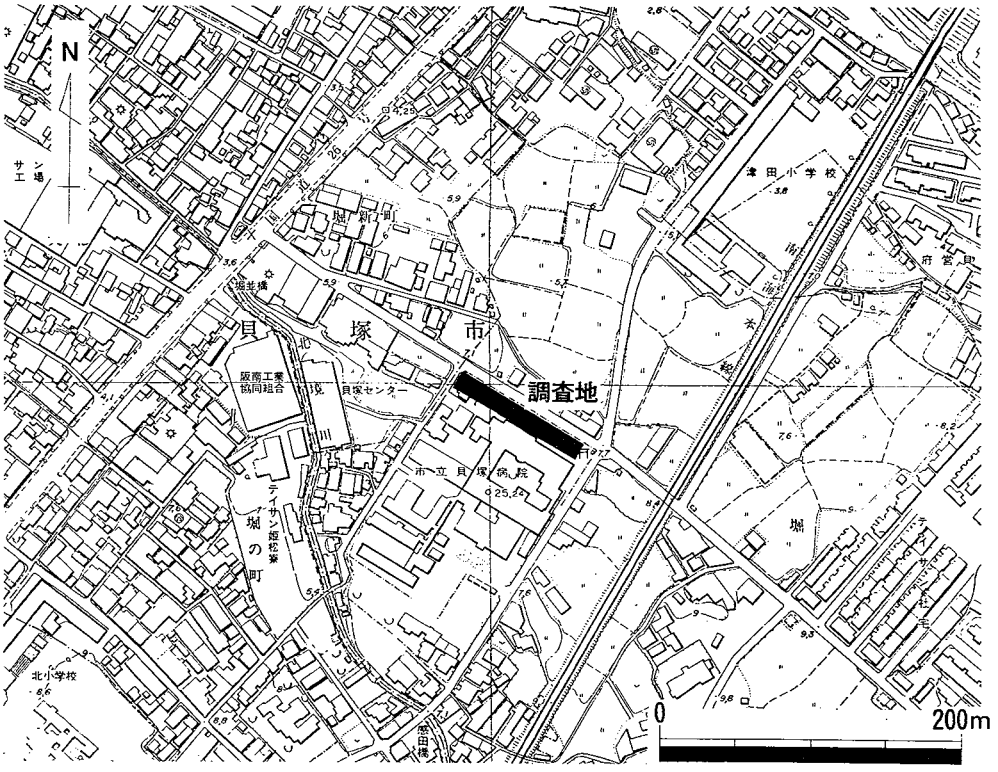


図２　調査地位置図

中遺跡などがある。北側には中世の集落跡である福田遺跡、弥生～室町時代の散布地である新井鳥羽遺跡、近年の調査で耕作跡、流路跡が発見された新井鳥羽北遺跡等がある。東側には古墳～室町時代の集落跡である堀遺跡、弥生～古墳時代、中世にかけての散布地、集落跡である小瀬五所山遺跡などがある。(図１)

付近は本調査に至るまでの機会があまり無い地域であったが、今回市立貝塚病院改築の計画に伴い、調査に先立って試掘調査を行った。その結果、貝塚病院敷地の南側では南北に走る流路がある他、広く河原状を呈しており、北東部分に中世の包含層及び溝、土坑等を確認、検出した。

貝塚病院は昭和11年頃に計画が立案され、昭和14年に建設された。終戦後昭和20年には不慮の火災によって焼失している。しかしその後復旧され、昭和27～29年には増築工事が行われている。付近は字名が下ケ池といい、近所の人の話によると病院が建てられる前は耕作地であったらしい。また一帯は窯業のための粘土採集が行われた場所であるとのことで、それらは今回の調査結果と一致する。

今回調査地は市立貝塚病院の北東端にあたり、中世の遺構、遺物が検出されることが予想された。(図２)

第3章　調査成果

1.　調査の概要

本調査は既設建物を解体後、建設計画に沿って調査地西側に559㎡、東側に169㎡の調査区を設定した。

調査区は西側を第１区、東側を第２区とし、国家座標に基づいて５ｍ×５ｍの区画を行った。区画は南北に13区画、東西に17区画を設け、北よりＡ～Ｍ、西より１～17の番号を与えた。(図３)

調査は盛土と現代耕土を機械で除去し、以下の包含層は人力で掘り下げた。遺構検出は第４層上面と地山上面で行った。第４層上面では鋤溝数条を検出したが、主な遺構は地山上面に集中しており、また第４層は薄く、上面の遺構は地山上面において検出可能であるため、第４層を下げ、地山上面で主な遺構検出を行うことにした。その結果、調査区全域で遺構を検出した。

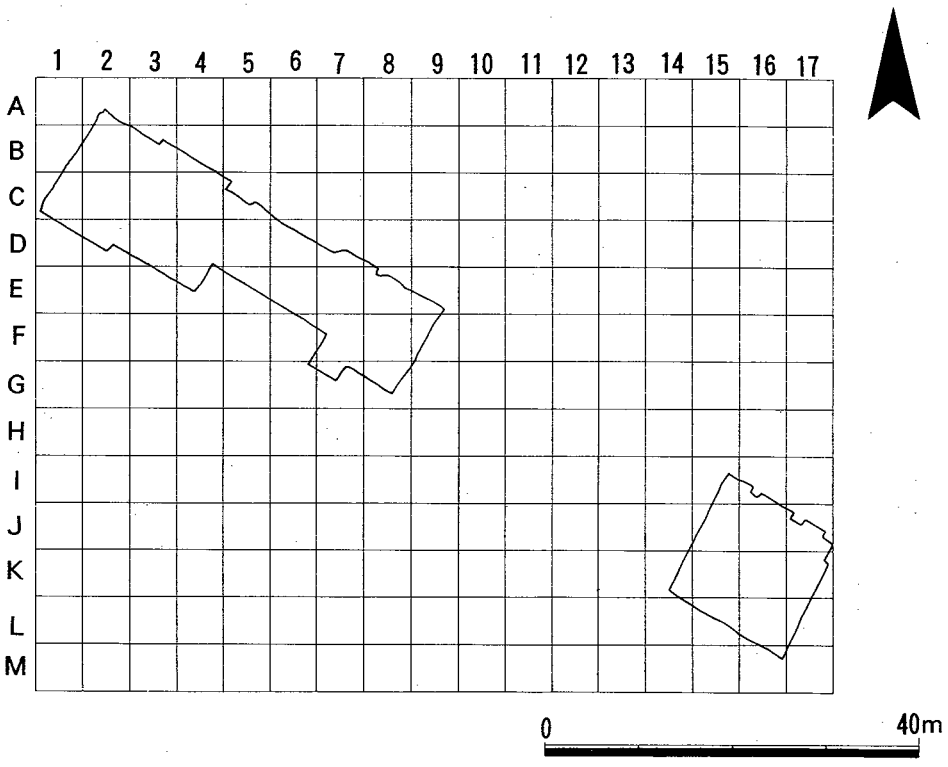


図３　調査区地区割図

2. 基本層序　（図4）

調査区の層序は基本的に4層に分けられる。上層より、第1層は層厚約15～50cmを測る盛土である。遺物は肥前陶磁器や市立貝塚病院の銘の入った食器類等が出土しており、市立貝塚病院の建設以降の時期と考えられる。第2層は層厚約10～20cmを測る黒褐色シルトで、現代耕土である。第3層は層厚約2～8cmを測る暗オリーブ灰色砂質土で、第2層の床土である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦、肥前磁器、陶器、土錘が出土しており、江戸～明治頃の時期が与えられる。第4層は層厚約2～10cmを測る。暗灰色砂質土、暗紫灰色粘土、黒褐色粘土が混ざりあい、全体的に薄く、一部途切れる部分もある。遺物の出土は見られない。地山は黄灰白色砂礫混粘土で、一部では黄灰色砂礫になる部分もある。調査区現地表面のT．P．は6.61～6.68mで、地山面のT．P．は6.30～6.42mを測り、西に向かって低くなる。

3. 検出遺構　（図5、6、図版1、2）

調査では、一部第4層上面より掘り込まれた遺構もあるが、その多数を地山上面において検出した。遺構は、第4層上面の遺構として鋤溝数条と第1区で浅い土坑3基、第2区で深さ1m前後の土坑3基を確認した。また、第1区、2区ともに全域に流路を検出したが、第1区では流路埋没後に掘り込まれた遺構が多数あり、煩雑になるため、調査後にトレンチを一部設定し、深さ等を確認した。

各遺構の時期については、遺構内の出土遺物が少なく、確定は難しい状況であった。

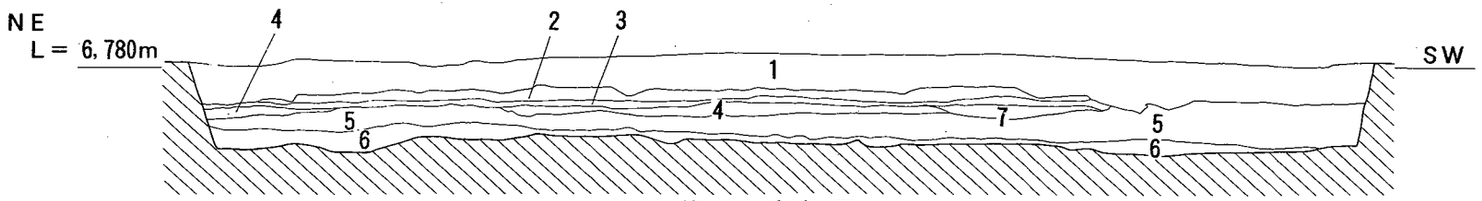
以下、主な遺構について概要を示す。

SD－1、2、3、4、5　（図6、図版4）

本遺構は第2区全面で検出した自然流路である。枝を広げるように、南西にのびる幅0.7～3.5mの支流を持ち、南東～北西に広がっている。深さは0.3～0.5mを測り、南東～北西方向に流れていたと考えられる。埋土は暗紫灰色粘土から下層に向かって砂粒を多く含み、最下層では灰色砂礫となる。埋土中には淡灰色極細砂のラミナが存在する。遺物の出土は無い。

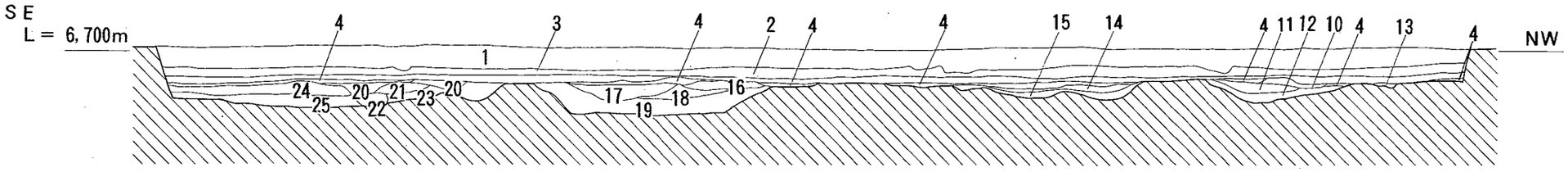
SD－13　（図9、図版8）

本遺構は第1区C～E－5区で検出した溝である。SK－5に切られているが、幅1～



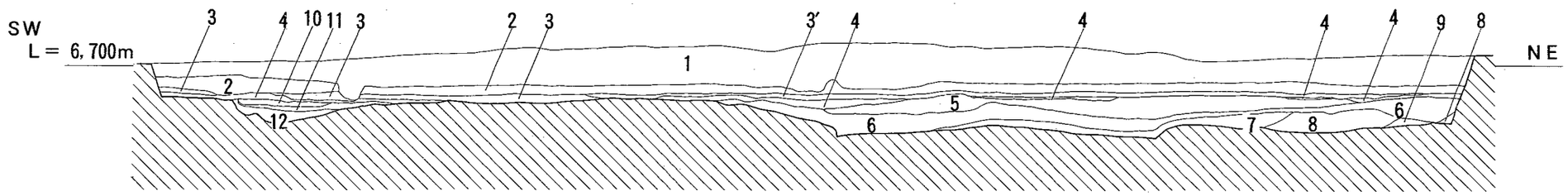
第１区　東壁断面

1　盛土
2　黒褐色シルト質土（現代耕土）
3　暗オリーブ灰色砂質土
4　暗灰色砂質土、暗紫灰色粘土、黒褐色粘土の混在土
5　暗紫灰色粘質シルト
6　黒褐色粘土　} 流路埋土
7　暗オリーブ灰色砂質土（鋤溝埋土）



第２区　南壁断面

1　盛土
2　黒褐色シルト質土（現代耕土）
3　暗オリーブ灰色砂質土
3′　褐灰色砂質土
4　暗灰色砂質土、暗紫灰色粘土、黒褐色粘土の混在土
5　暗紫灰色粘質シルト
6　黒褐色粘土
7　暗紫灰色砂礫混黒褐色粘土
8　淡紫灰色細砂～砂礫
9　暗紫灰色砂礫含粘土　} ＳＤ－4埋土
10　暗紫灰色シルト
11　暗紫灰色シルト質粘土
12　暗紫灰色極細砂～砂礫　} ＳＤ－5埋土
13　暗紫灰色シルト質粘土
14　暗紫灰色粘土
15　暗紫灰色砂礫～極細砂　} ＳＤ－3埋土



第２区　西壁断面

16　黄灰色粗砂
17　暗紫灰色粘土
18　淡紫灰色中砂～極細砂　} ＳＤ－2埋土
19　灰色砂礫
20　暗紫灰色シルト質粘土
21　淡紫灰白色砂礫～細砂
22　灰色砂礫
23　暗褐色砂礫混粘土
24　暗紫灰色粘土
25　紫灰白色シルト質粘土　} ＳＤ－1埋土

0　2m

図４　調査地土層図

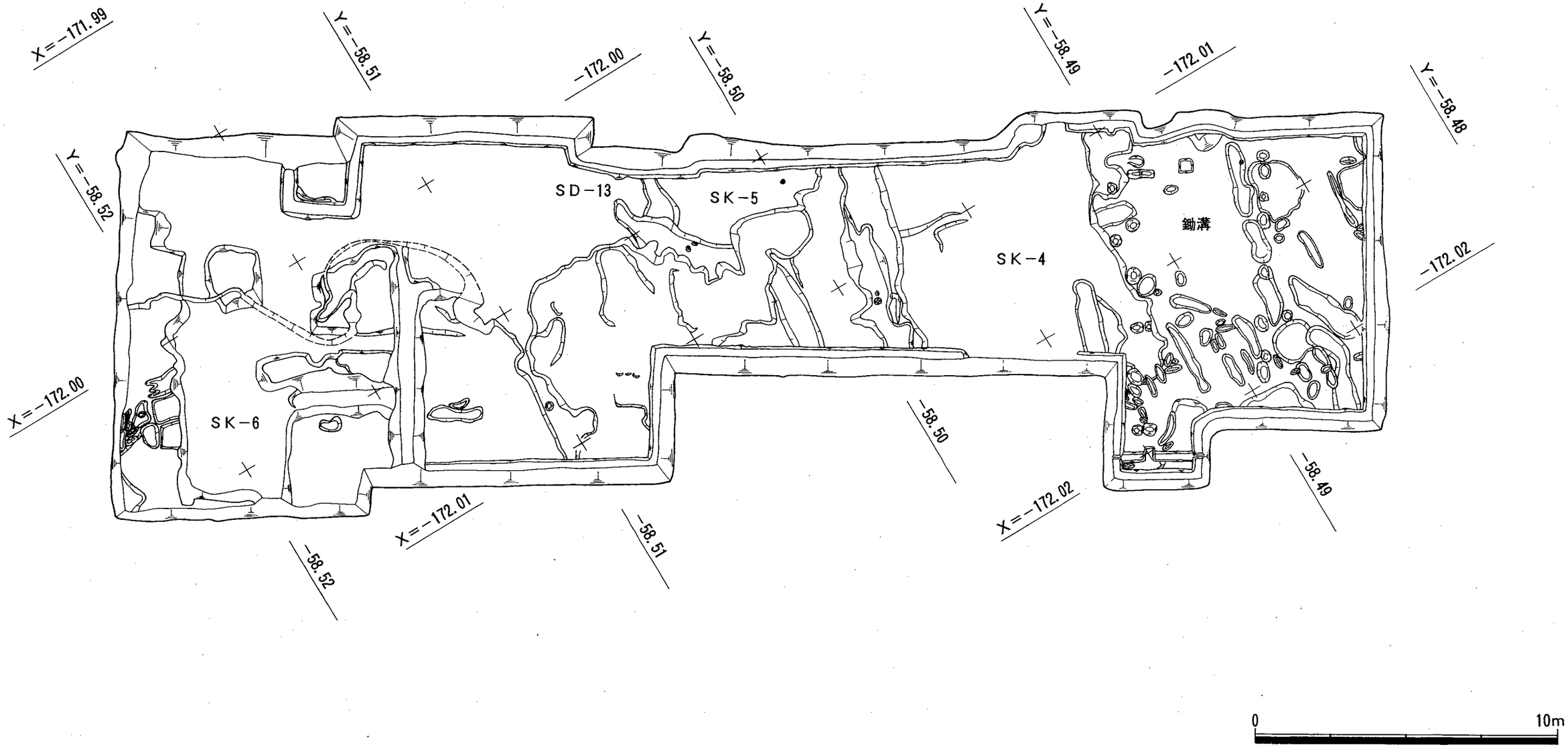

X=−171.99
Y=−58.51
−172.00
Y=−58.50
Y=−58.49
−172.01
Y=−58.48
Y=−58.52
SD−13
SK−5
SK−4
鋤溝
−172.02
X=−172.00
SK−6
−58.50
−58.49
X=−172.02
X=−172.01
−58.51
−58.52
0
10m

図5　第1区　遺構配置図

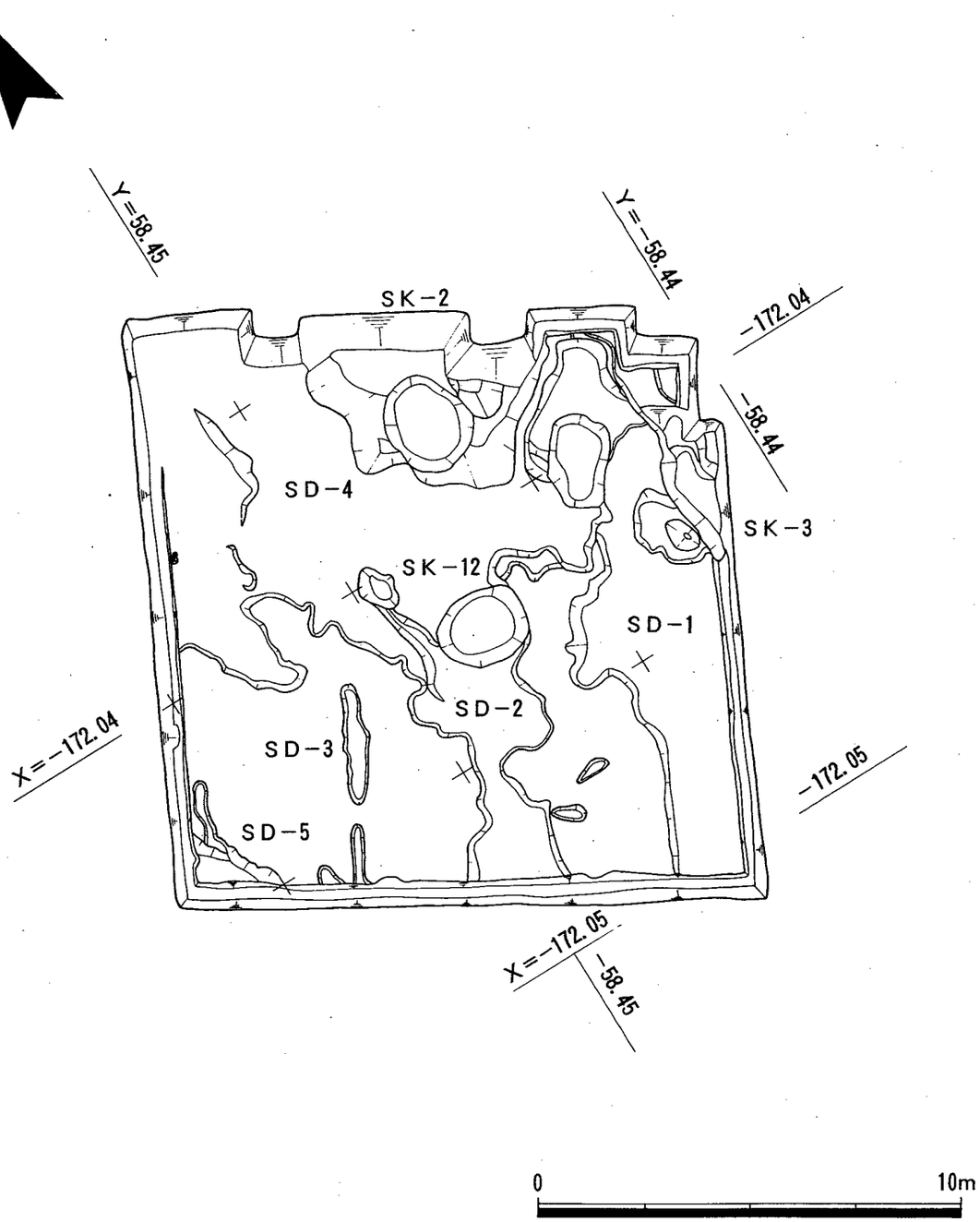
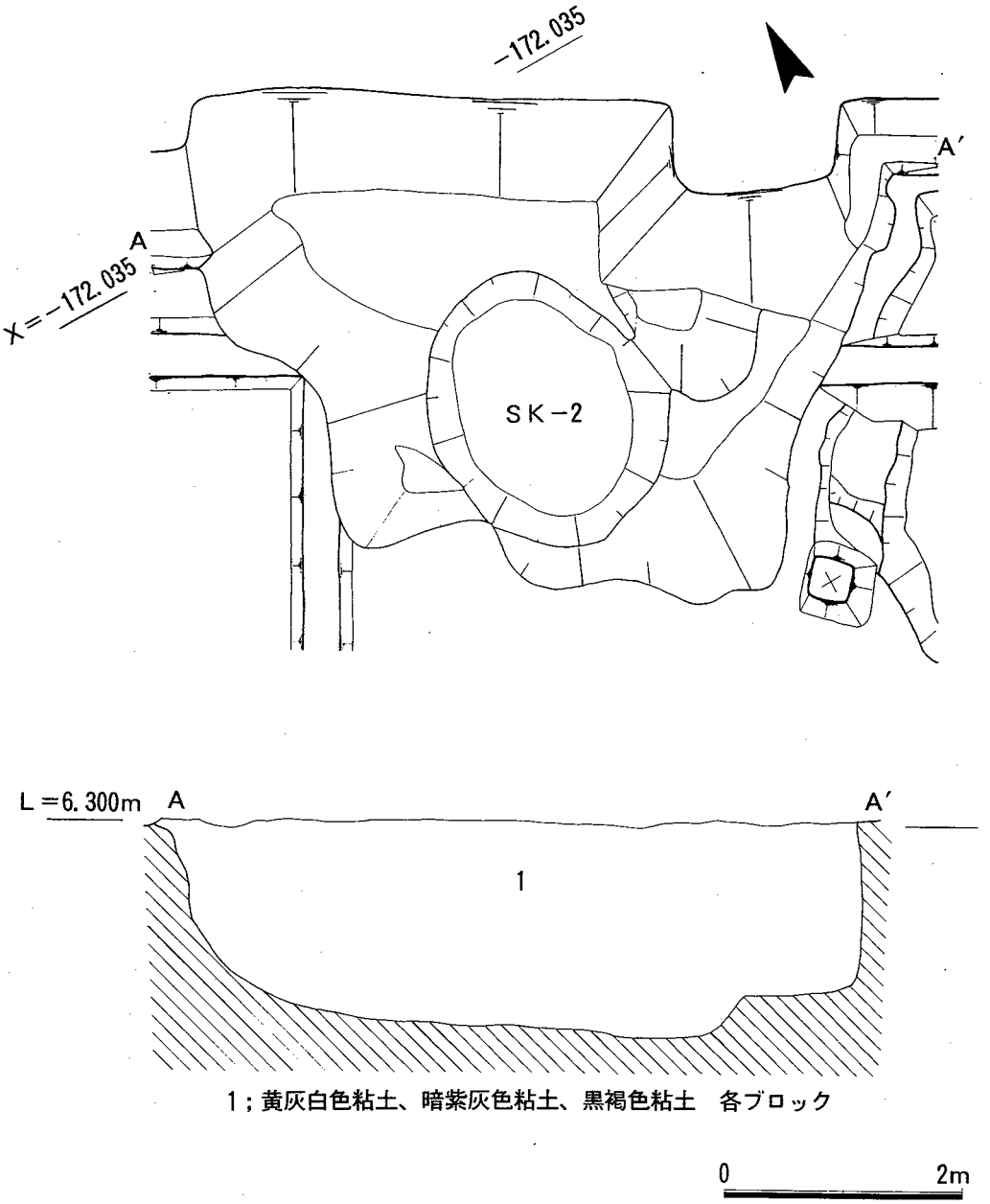

Y=58.45
Y=-58.44
-172.04
-58.44
SK-2
SD-4
SK-3
SK-12
SD-1
SD-2
SD-3
SD-5
X=-172.04
-172.05
X=-172.05
-58.45
0
10m

図6　第2区　遺構配置図

1.4mで蛇行しながら北西～南東にのび、調査区の北側で攪乱のために途切れている。深さは0.3～0.6mで、南東から北西の方向に流れていたと考えられる。埋土は最上層が淡赤褐色シルト質粘土で、その下は赤褐色シルト質粘土となり、下層になるにつれ砂礫を多く含む。遺物は少なく、土師器が数片出土している。



1；黄灰白色粘土、暗紫灰色粘土、黒褐色粘土　各ブロック

図7　SK－2

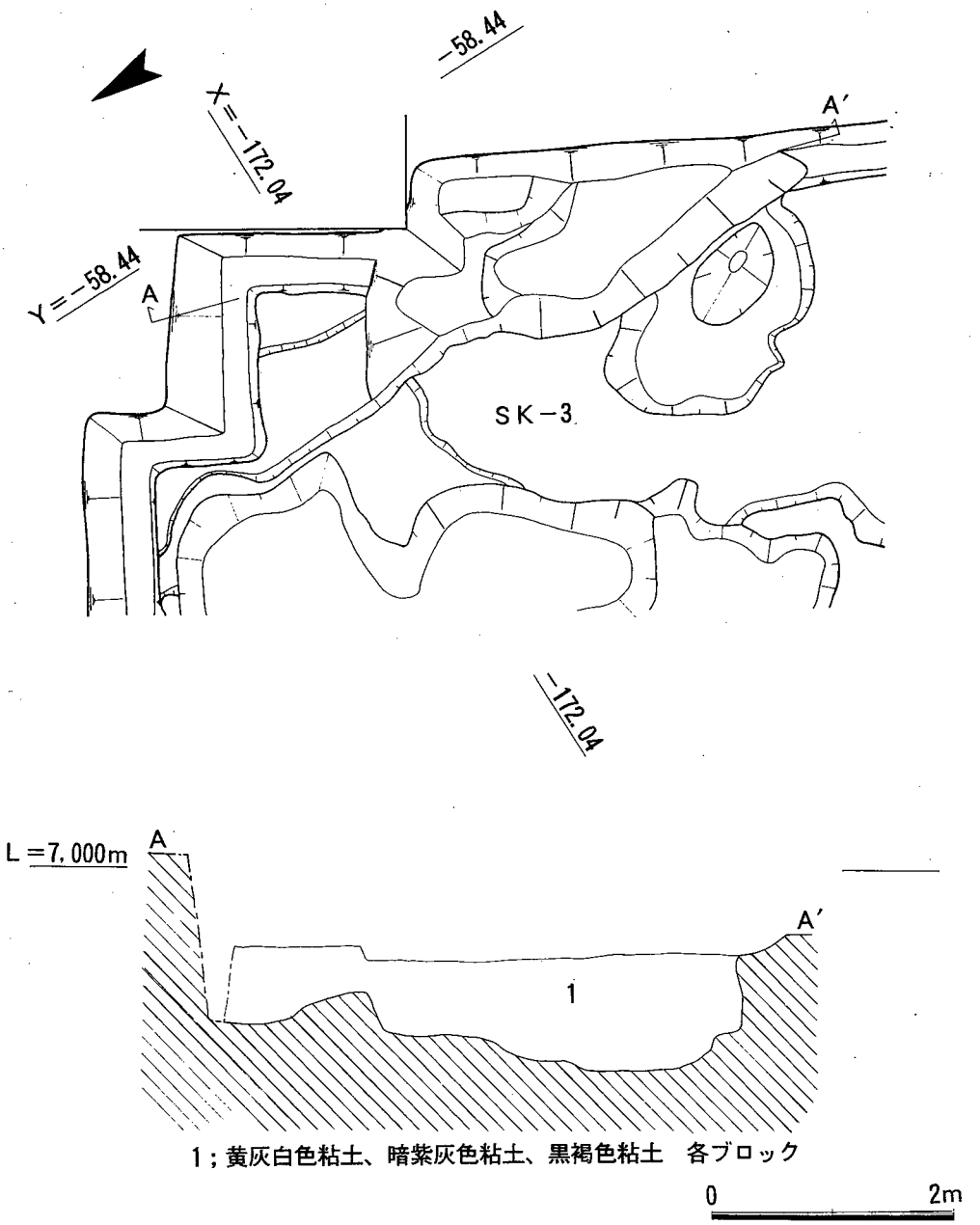


図8　SK－3

SK－2　（図7、図版5）

本遺構は第2区J－16・17区で検出した性格不明遺構である。調査区北側外にのびるため、全容は明らかにし得ないが、最大幅東西5.9m、南北4.1mを測り、不整円形を呈するものと考えられる。深さは1.35～1.8mを測り、かなり深い。埋土は黄灰白色粘土、暗紫

灰色粘土、黒褐色粘土のブロックが密に混在しており、各ブロックは黄灰白色粘土が地山、紫灰色粘土、黒褐色粘土はＳＫ－２より下に存在する流路の埋土と考えられる。遺物は土師器、肥前磁器、瓦が出土した。遺構の性格については、出土遺物も少なく確定はできないが、埋土に各層のブロックが混在した状況を呈し、掘方等の痕跡が認められず井戸とは考えにくいことから、粘土採集の穴と考えるのが妥当と思われる。

SK－３　（図８、図版５、６）

本遺構は第２区Ｊ・Ｋ－17区で検出した性格不明遺構である。調査区外にのびるため、全容は明らかでない。最大幅は東西1.5～２ｍ、南北４.2ｍを測り、深さは0.4～0.95ｍである。遺物は土師器、陶器、瓦が出土した。埋土はＳＫ－２と同様、黄灰白色粘土、暗紫灰色粘土、黒褐色粘土のブロックが密に混在しており、ＳＫ－２と同じく不整円形を呈した粘土採集の穴と考えられる。

SK－１２　（図６）

本遺構は第２区Ｋ－16区で検出した性格不明遺構である。南北1.7ｍ、東西2.1ｍの楕円形を呈す。深さは0.68～0.77ｍである。遺物の出土は無い。埋土はＳＫ－２と同様、黄灰白色粘土、暗紫灰色粘土、黒褐色粘土のブロックが密に混在しており、ＳＫ－２と同じく不整円形を呈した粘土採集の穴と考えられる。

SK－４・SK－５・SK－６　（図９、図版６、７）

ＳＫ－４は第１区Ｄ～Ｆ－６・７区で検出した性格不明遺構である。幅約６～７ｍで、南北に細長くのびている。深さは約0.1～0.3ｍである。埋土は暗オリーブ灰色砂質土に紫灰色粘土、黄灰白色粘土（地山）のブロックが混在し、遺物は土師器、瓦器、瓦、肥前磁器、陶器、土錘等が出土している。

ＳＫ－５は第１区Ｃ～Ｅ－４～６区で検出した性格不明遺構である。東西の最大幅約11.4ｍで、不整形を呈す。深さは約0.1～0.3ｍである。埋土はＳＫ－４と同様暗オリーブ灰色砂質土に紫灰色粘土、黄灰白色粘土（地山）のブロックが混在し、遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦、肥前磁器、陶器、土錘等が出土している。

ＳＫ－６は第１区Ｂ～Ｅ－１～３区で検出した性格不明遺構である。東西の最大幅約14.7ｍで、調査区の南西隅に広がっている。深さは約0.1～0.2ｍである。埋土はＳＫ－４

と同様暗オリーブ灰色砂質土に紫灰色粘土、黄灰白色粘土（地山）のブロックが混在し、遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦、肥前磁器、陶器、土錘等が出土している。

この周辺は脇浜にある大阪窯業に売るための粘土を採集したことが知られている。したがって本遺構群も粘土採集の跡と考えられる。

鋤溝　（図５、６、図版８）

本遺構は第１区Ｅ～Ｇ－７～９区、第２区Ｊ～Ｌ－15・16区において検出した鋤溝である。第４層上面より掘り込まれた遺構で、調査地東側に集中している。幅0.15～0.8m、深さ0.02～0.05mを測る。埋土は暗オリーブ灰色砂質土である。鋤溝はほぼ南北方向のものがほとんどで、それよりも新しく、直交する東西方向のものが少数認められる。遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦、磁器、陶器、土錘が出土している。

3.　出土遺物

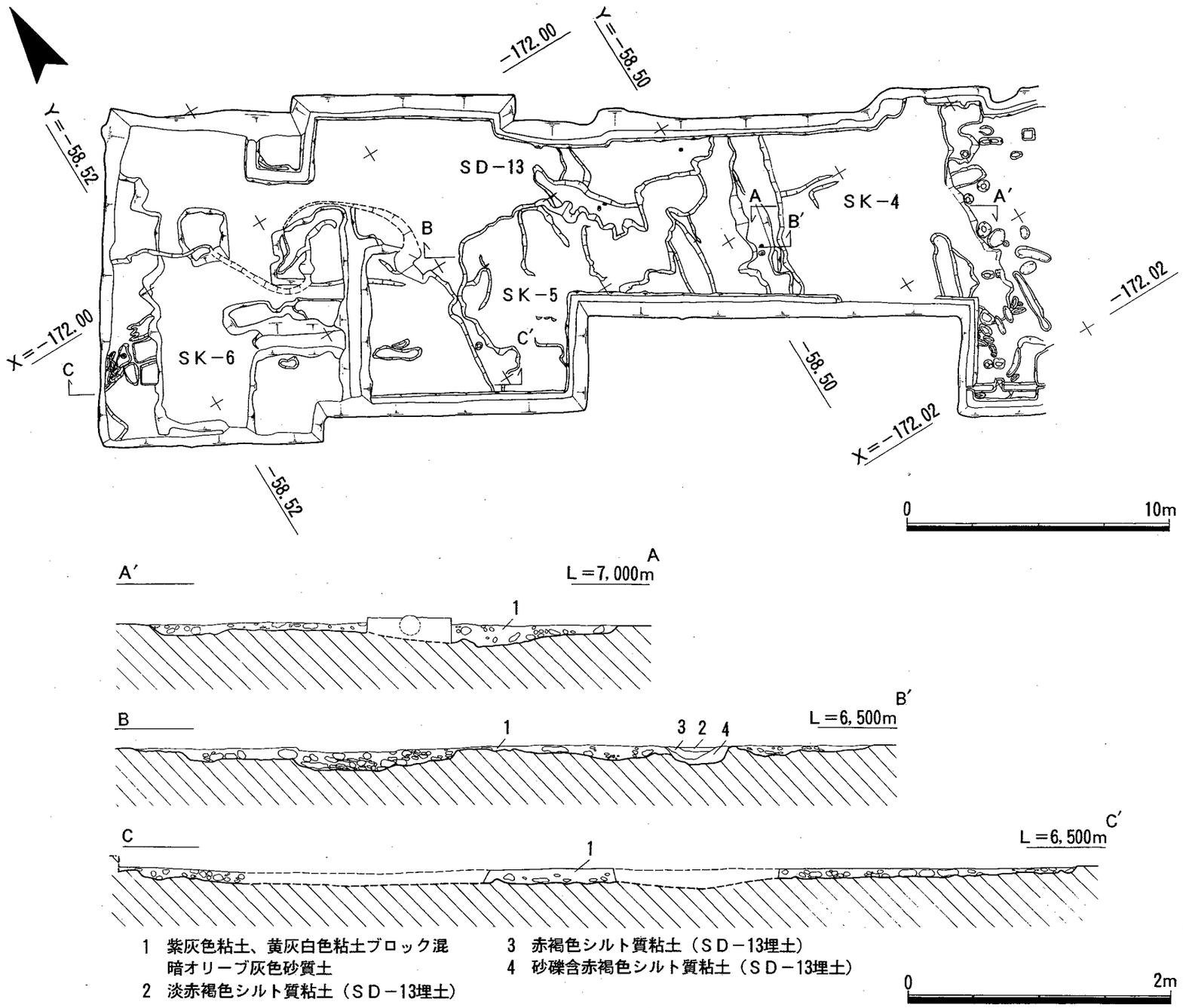
本調査では出土遺物が少ない上、破片が多く図示できるものは極僅かであった。

遺物は中世の土師器、須恵器、瓦器等が出土しているが、これらは明らかに混入の状態を呈しており、遺構及び包含層の時期に伴うものではない。出土遺物の中心は陶器、磁器等である。これら出土遺物の少ない中で、特に土錘の多さが注目される。幅１cm、高さ４cmの小型品が多いが、幅４cm前後の品も出土している。また、調査地の北側には江戸～幕末頃の陶器の窯が存在したとされているが、本調査では製品と思われる陶器や窯道具は数点出土したのみであった。以下その概要を示す。

SK－４　（図10、図版９）

１～４は肥前磁器の碗である。１は底部で、高台径 7.4cmを測る。内面には草花文を描いている。２は径10cm、高さ４.7cmに復元できる。外面に祥瑞文を描いている。３・４は波佐見焼と思われる。３は径10.2cmの二重網目文、４は径８.6cmの草花文を描いたものである。

５～７は陶器である。５は高台径５.4cmである。灰釉を施し、内面には砂目跡が残っている。６は径12cmを測る碗である。淡黄色の灰釉を施している。７は土瓶蓋である。透明釉を施し、蓋の表面には沈線を巡らせる。12・15は土錘である。土師質で赤褐色を呈し、径0.8～１cmである。



1　紫灰色粘土、黄灰白色粘土ブロック混暗オリーブ灰色砂質土
2　淡赤褐色シルト質粘土（ＳＤ－13埋土）
3　赤褐色シルト質粘土（ＳＤ－13埋土）
4　砂礫含赤褐色シルト質粘土（ＳＤ－13埋土）

図９　ＳＫ－４、５、６、ＳＤ－13

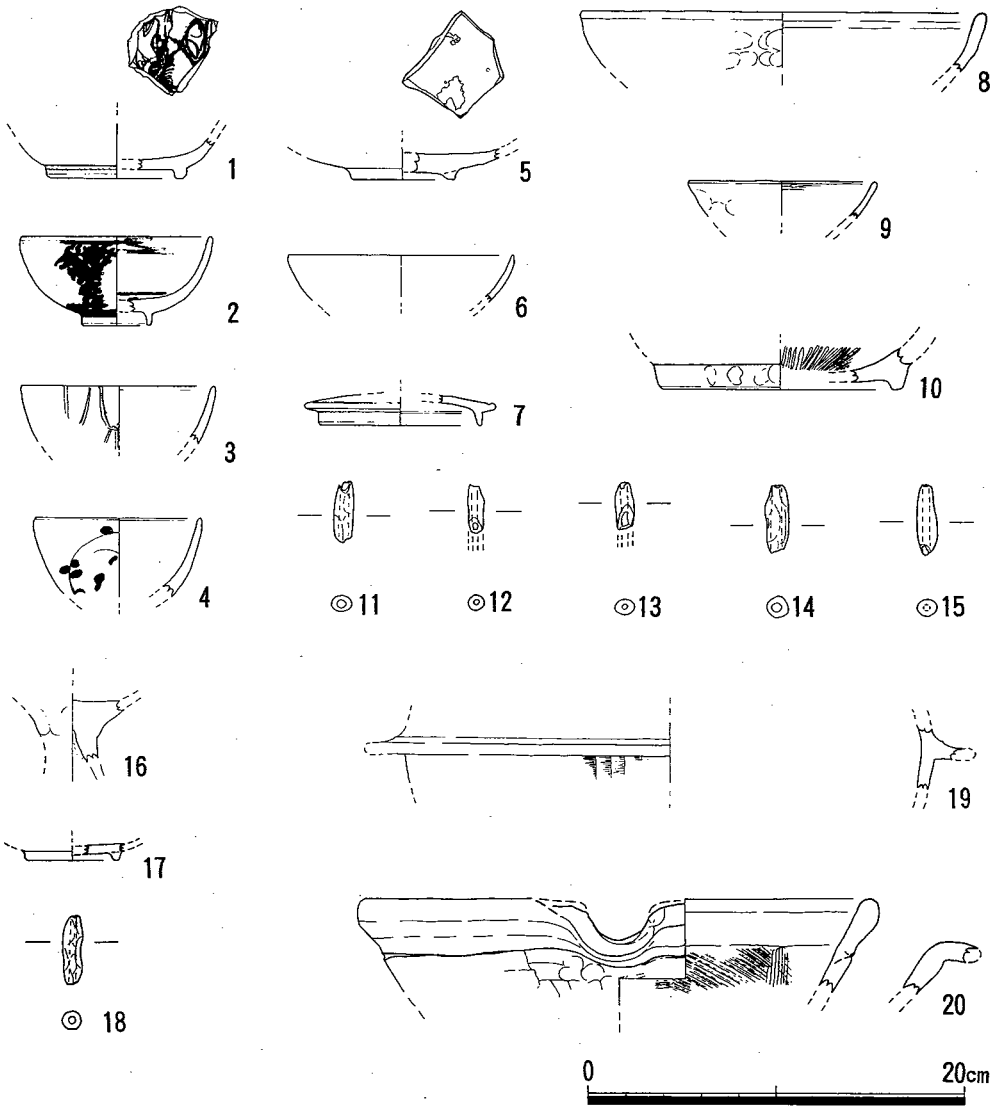


図10　ＳＫ－4（1～7、12、15）、ＳＫ－5（8～11、13、14）、ＳＫ－6（16～20）出土遺物

SK－５　（図10、図版９）

８は土師器の杯である。径21.2cmを測る。口縁部によこナデを施し、内面には指頭圧痕が残る。調整は磨耗がひどく、不明である。９は瓦器碗である。径10cmを測り、内面にミガキを施す。外面には指頭圧痕が残る。10は陶器摺鉢の底部である。高台径12.6cmで赤褐色を呈し、内面の摺目は５本を１単位としている。11・13・14は土師質の土錘で、赤褐色を呈す。13は欠けており、全体の長さが不明であるが、他は径１～１.2cm、長さ3.2～3.5cmである。

SK－6　（図10、図版９）

16は土師器の高杯脚部である。17は瓦器碗である。高台径４.8cmを測り、高台は貼り付けである。18は土師質の土錘である。赤褐色を呈し、径１cm、長さ３.6cmを測る。19は土師質の羽釜である。内外面にヘラケズリを施し、ヘラケズリの後、内面を撫でている。20は須恵器の摺鉢である。径27.6cmを測り、外面にはヘラケズリを施す。

包含層第３層（図11、図版９、10）

21は瓦質羽釜である。径22cmを測る。内面は横ナデの後ハケ目を施し、口縁部外面には３本の沈線を巡らす。22・23は青磁である。22は径23cmを測る碗で、23は径８cmを測る香

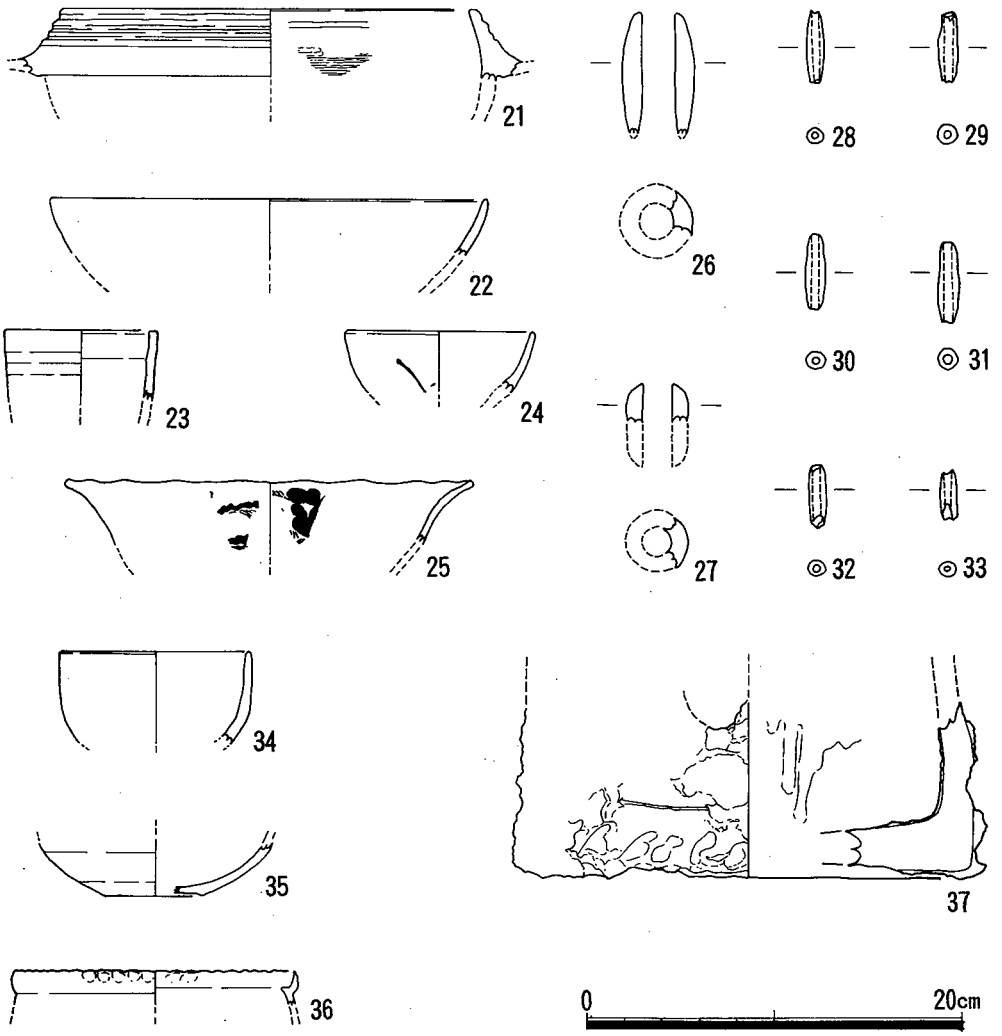


図11　包含層第３層出土遺物

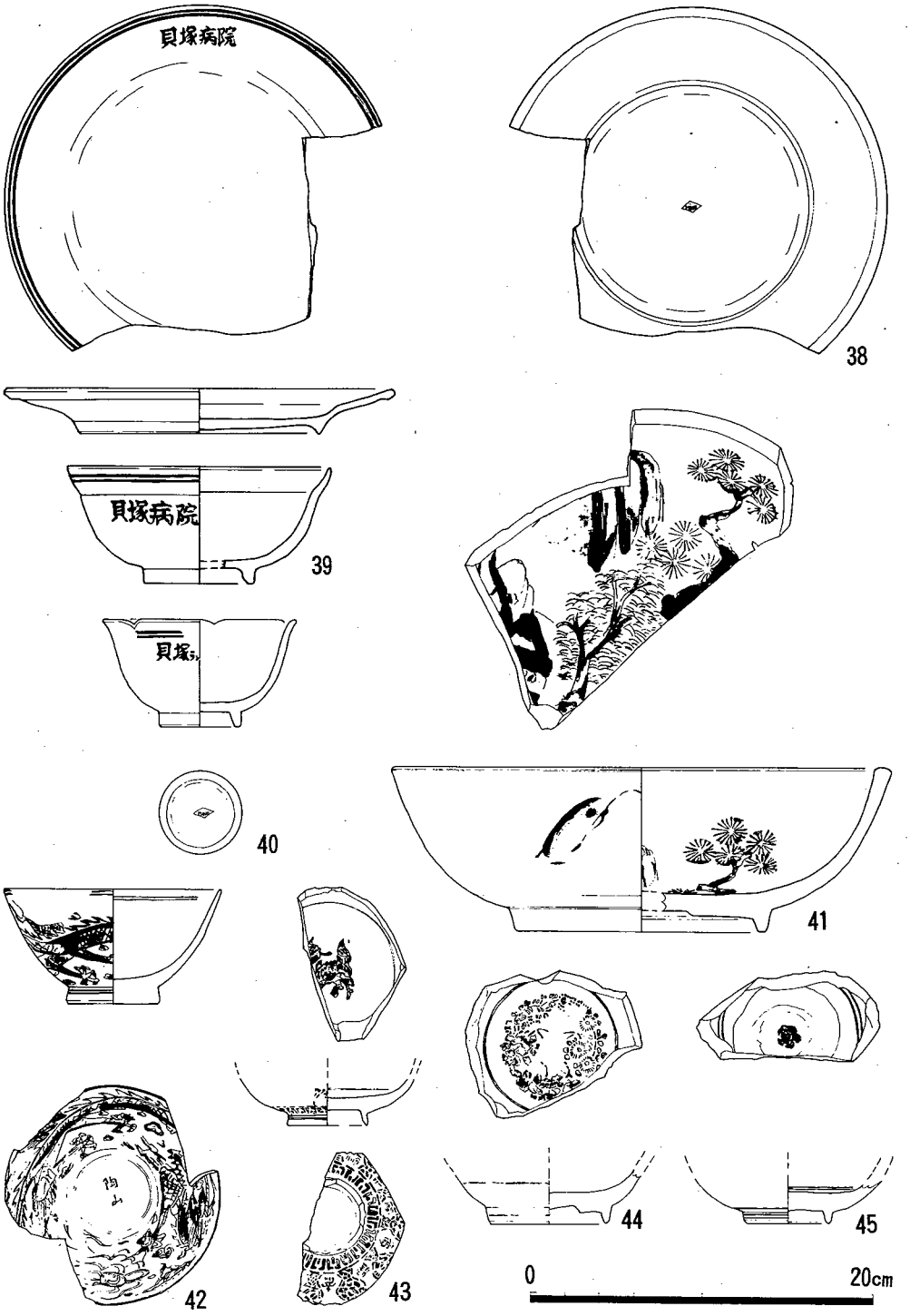


図12　包含層第１層出土遺物

炉である。24・25は肥前磁器である。24は径10cmを測る碗、25は径21.4cmを測る鉢で内外面に草花文を描いている。26～33は土師質の土錘である。26は径3.8cm、27は径3.4cmを測り、28～33は径0.8～1.1cm、長さ2.6～4.2cmを測る。34～36は陶器である。34は灰釉の碗で径９.8cmを測り、浅黄色を呈す。35は灰釉の土瓶底部である。底径５cmを測り、淡黄色を呈す。36は万古焼である。径14.8cmを測る。37は匣鉢である。底径25cmを測る。胎土は伊賀信楽焼系の良質の土を用い、密である。堀新町で焼かれたとされる陶器の窯道具と思われる。

包含層第１層　（図12、図版10）

38～40は貝塚病院で使われていたと思われる皿、碗、小鉢である。38は径22.8cm、高さ3.6cm、39は径15.4cm、高さ6.8cm、40は径11.4cm、高さ６.2cmを測る。いずれも緑釉で貝塚病院の銘が入っている。高台内にはＭＩＮＯの銘が入っており、美濃産であると思われる。41～45は肥前磁器である。41は径29.8cm、高さ９.6cmの鉢である。高台は蛇の目凹型高台で、内面には山水画を描いている。42は径12.6cm、高さ６.7cmの碗である。外面に龍文を描き、高台内に陶山の銘が入っている。43～45は波佐見産と思われる。43は高台径４.4cmを測る印判の碗である。外面は寿福の文字が描かれている。44は高台径７cmを測る印判の碗である。見込みに花文を描く。高台は蛇の目凹型高台である。45は高台径５cmを測る碗である。見込みには五弁花のコンニャク印判を施す。

第4章　ま　と　め

本調査では、最初中世の遺構が検出されることが予想されたが、結果的には中世の遺構は検出できなかった。本調査で検出した遺構および遺物は近世以降のものが中心であると考えられる。しかし、調査区の包含層および遺構の中からは中世以前の遺物も出土しており、本来調査区には中世の遺構が存在していたが、後世の遺構等によって壊されてしまったものと考えられる。

調査ではＳＫ－１～ＳＫ－６、ＳＫ－12といった土坑が、広い範囲で広がっていることが確認できた。土坑はＳＫ－４～ＳＫ－６のように暗オリーブ灰色砂質土の各ブロックが混在し、深さが比較的浅い土坑とＳＫ－２～ＳＫ－３、ＳＫ－12のように地山、暗紫灰色粘土、黒褐色粘土の各ブロックが密に混在し、深さが１ｍ前後と深い土坑の２種類の土坑を検出した。これら土坑は付近の人の聞き取りによって、粘土採集の跡として良いと思われる。両者の存在する理由としては、時期の違い、用途の違い等が考えられる。しかしＳＫ－２、３、12の各土坑の埋土は、地山面を深く掘り下げた後、すぐ埋め戻したかのような状況を呈し、この点がＳＫ－４～ＳＫ－６と様相を異にしており、一概に粘土採集の跡と断定しにくい面もある。このような土坑に関しては検出例もなく、遺物の出土も僅かであるので、性格について、今は不明と言わざるを得ないであろう。今後、他の類例を待ちたいと思う。土坑の時期に関しては、出土遺物が少なく断定することは難しいが、ＳＫ－３～ＳＫ－６からは19世紀以降の陶磁器が出土しており、ほぼこの時期と断定できるものと考えられる。

自然流路は第２区で全面的に検出し、第１区にも続いていることが認められた。第１区の自然流路に関してはトレンチで深さを確認し、自然流路は南東～北西方向に流れていたものと考えられる。方向的に見ると、おそらく調査区の東を流れる津田川に流れこんでいたのではないかと思われる。時期については、遺物の出土が無いため不明と言わざるを得ない。調査区の南側では、試掘調査の際に南北の自然河川を検出しており、付近も河原状を呈していた。こうした試掘調査および今回の調査結果をふまえると、調査区周辺では開発を受ける以前より、自然河川の流れる地域であったと考えられる。調査地の字名が下ケ池というのも、このような周辺の状況の名残であった可能性がある。

調査地は日本近世窯業史に「音羽焼」として紹介されている幕末～明治にかけて陶器の

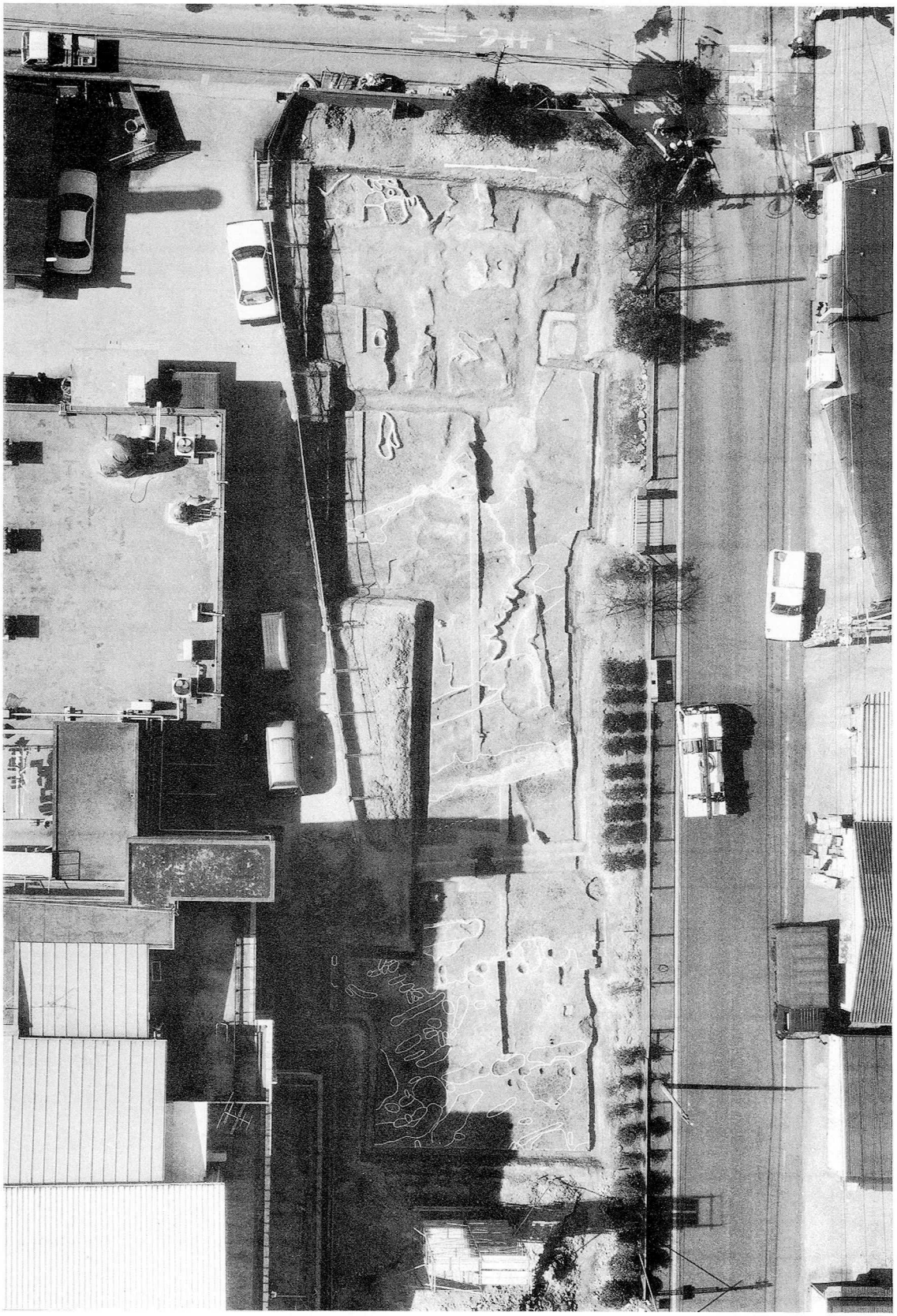
窯が築かれたとされる場所の南側にあたる。周辺を調査すると、灰釉をかけた薄手の陶器が大量に出土することがある。陶器は土瓶、土鍋、片口、鉢、徳利、灯明具等の器種があり、胎土は固く焼きしめられ灰色を呈し、磁器質である。それらとともに、窯道具や素焼きの未製品等も多く出土することから、周辺に窯が存在したことは、確実と考えられる。

調査区からは、窯道具である匣鉢やとちん等が出土しており、陶器片も数点出土している。しかしその数は僅かであり、胎土も灰白色で軟質のものも含み、必ずしも貝塚で焼かれたものばかりとは限らないようである。したがって本調査地は、これら陶器の窯とはあまり関係の無かったものと考えられる。

今回の調査は限られた範囲での調査であり、多くの課題を残した。その中で粘土採集の穴を検出したことにより、調査地周辺が窯業に適した粘土を多く採集できる地であったことがわかった。また今回は中世以前の遺構は検出できなかったが、遺物は出土しており、周辺には必ず存在するものと思われる。いずれにしても、今後周辺を調査すれば今回の調査に関連した何らかの遺構が発見されることは明らかであり、開発には十分な対処が必要となってくる。また今後調査例が増えれば今回残した課題の解決の糸口も見つけることができるものと期待している。

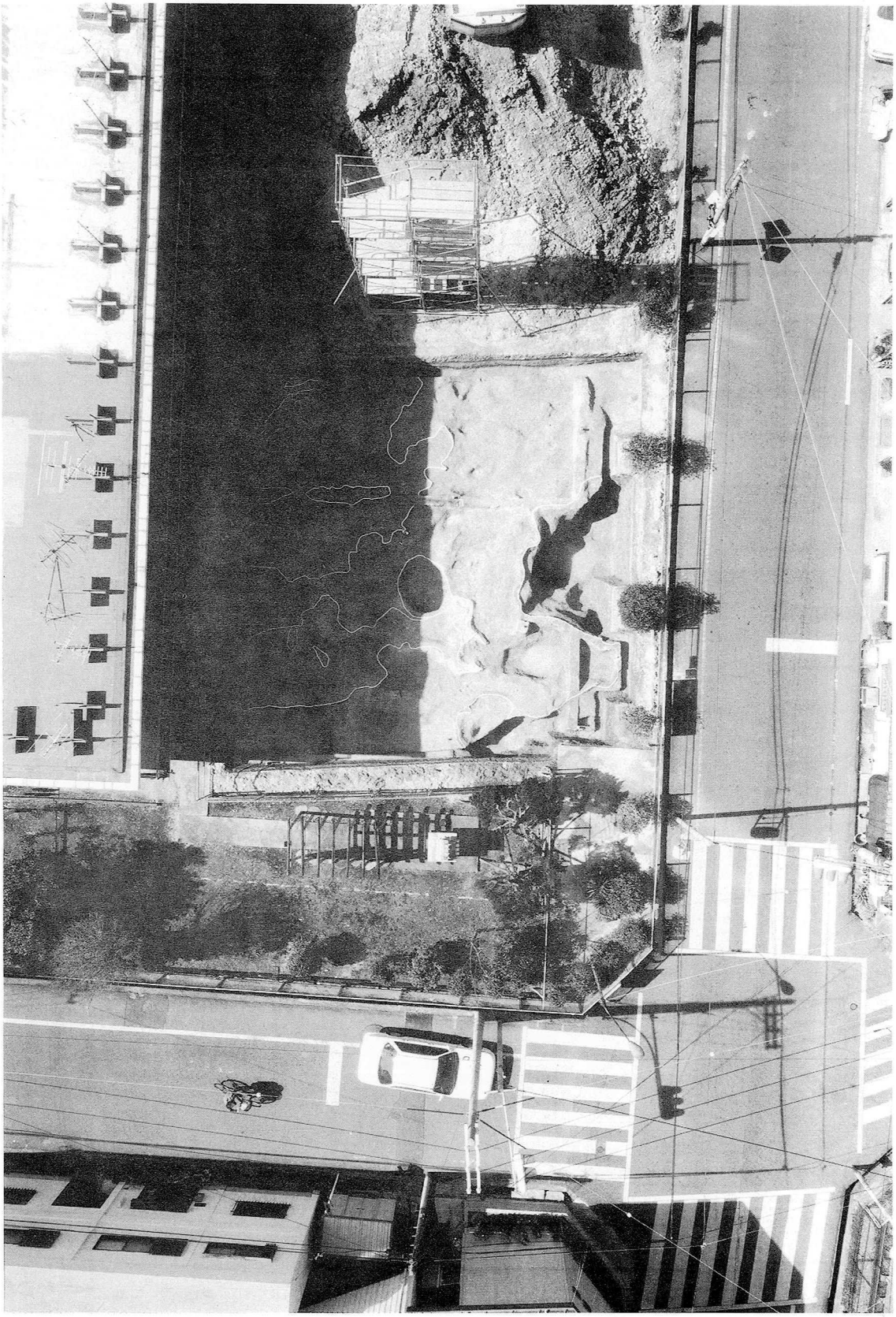
図　　版

図版1　検出遺構



第1区全景

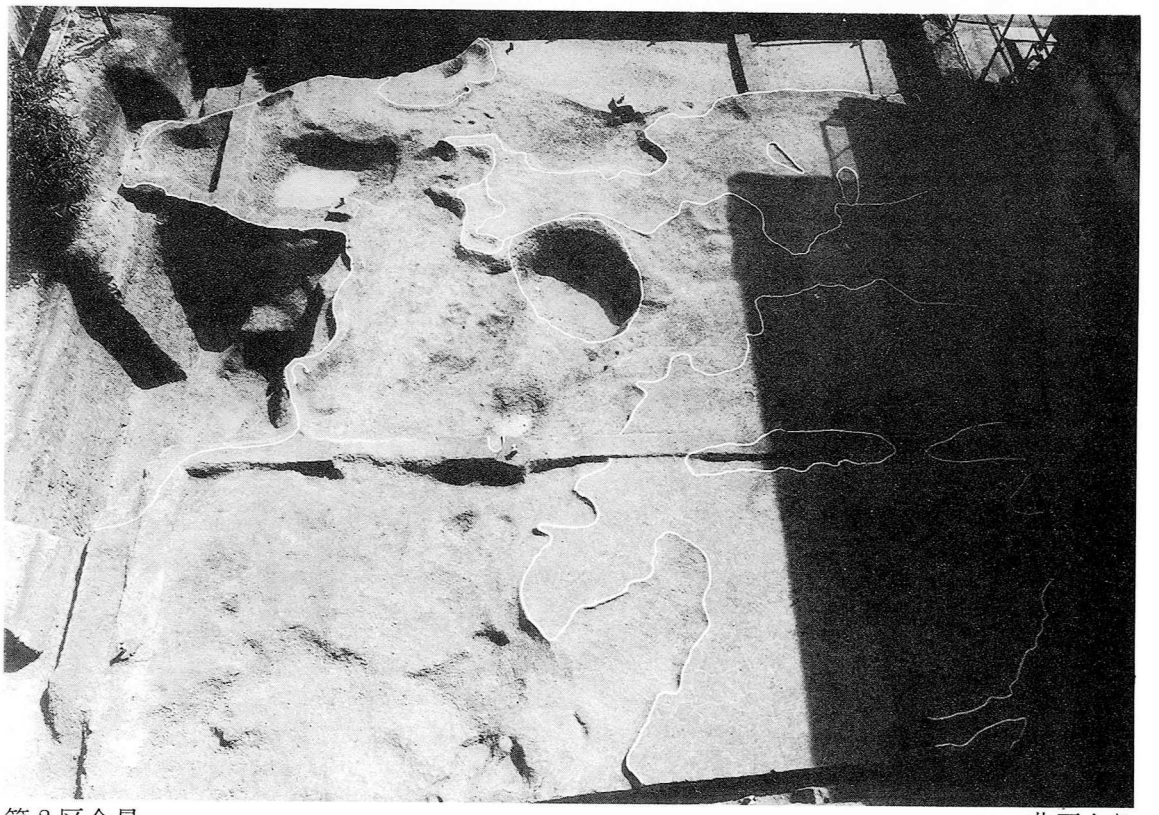
図版2　検出遺構



第2区全景

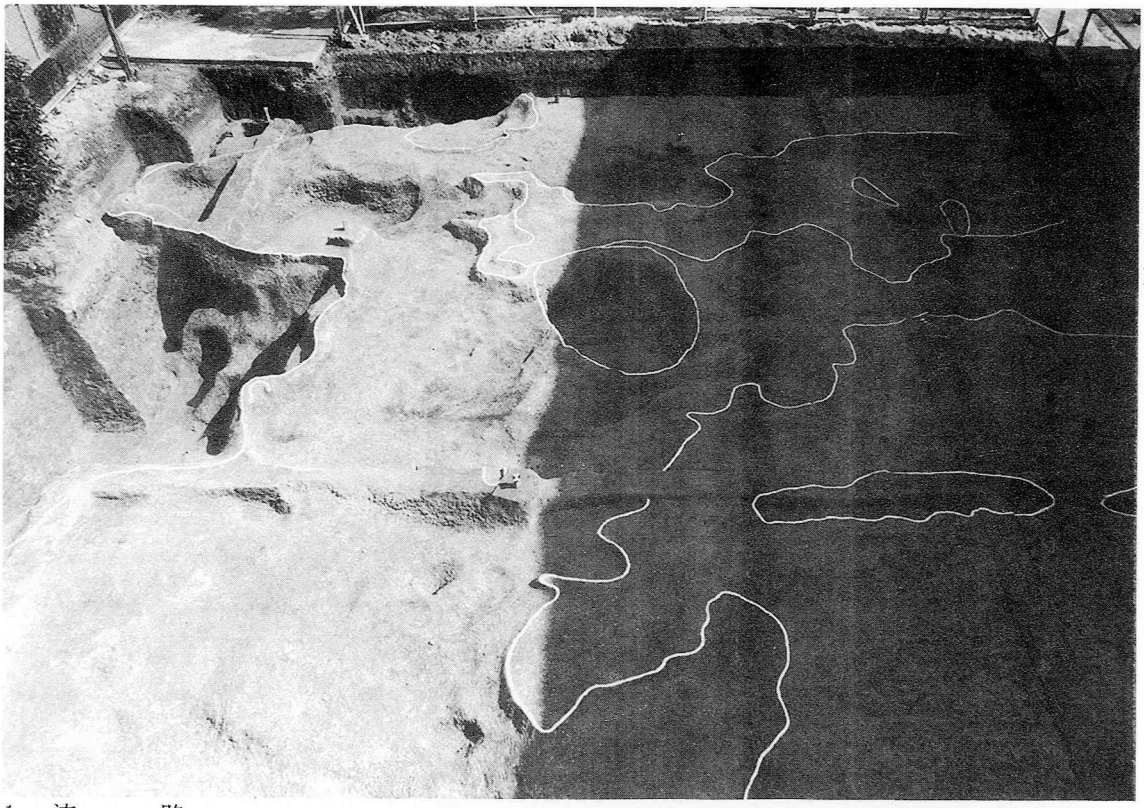
図版3　検出遺構

第1区全景　　南東より

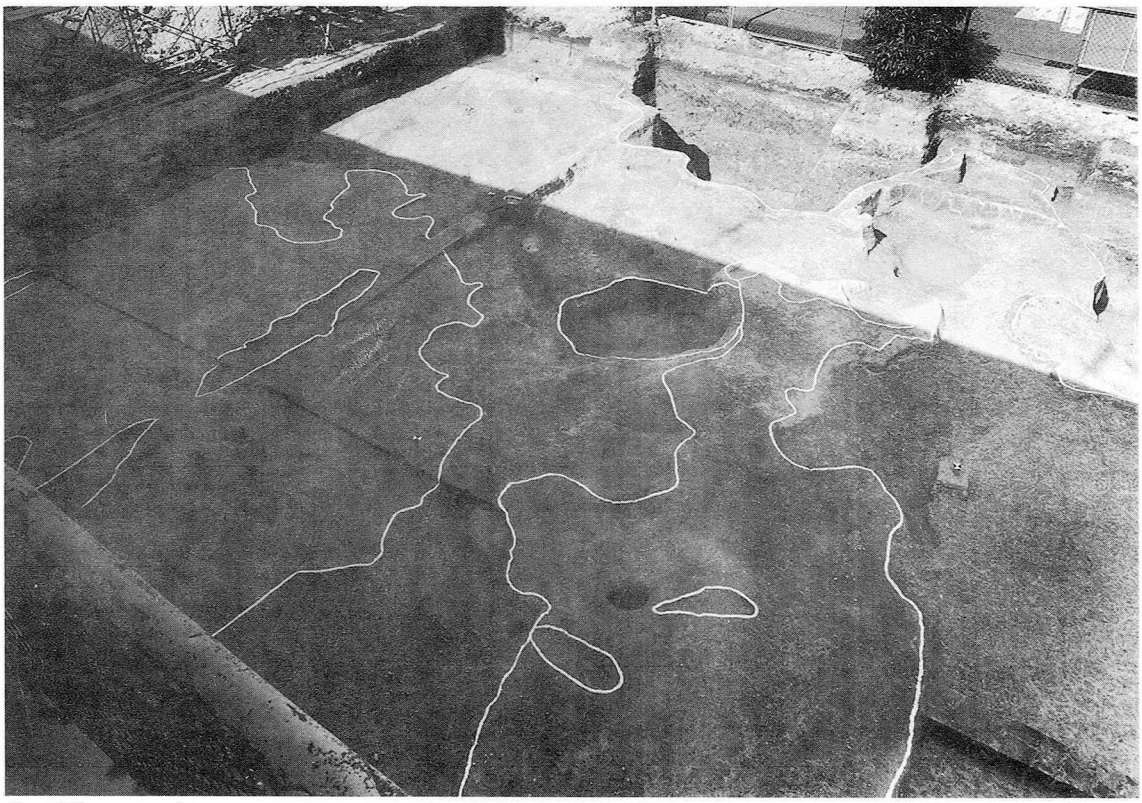


第2区全景　　北西より

図版4　検出遺構

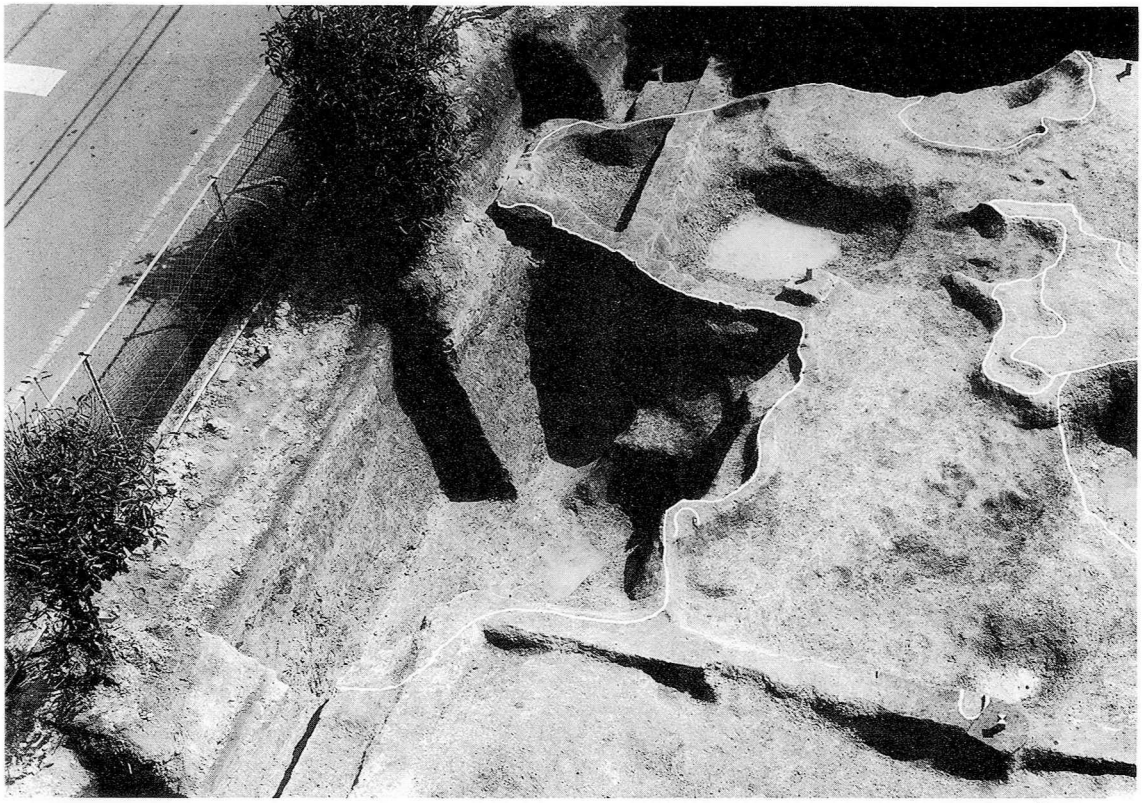


1．流　　路　　北西より

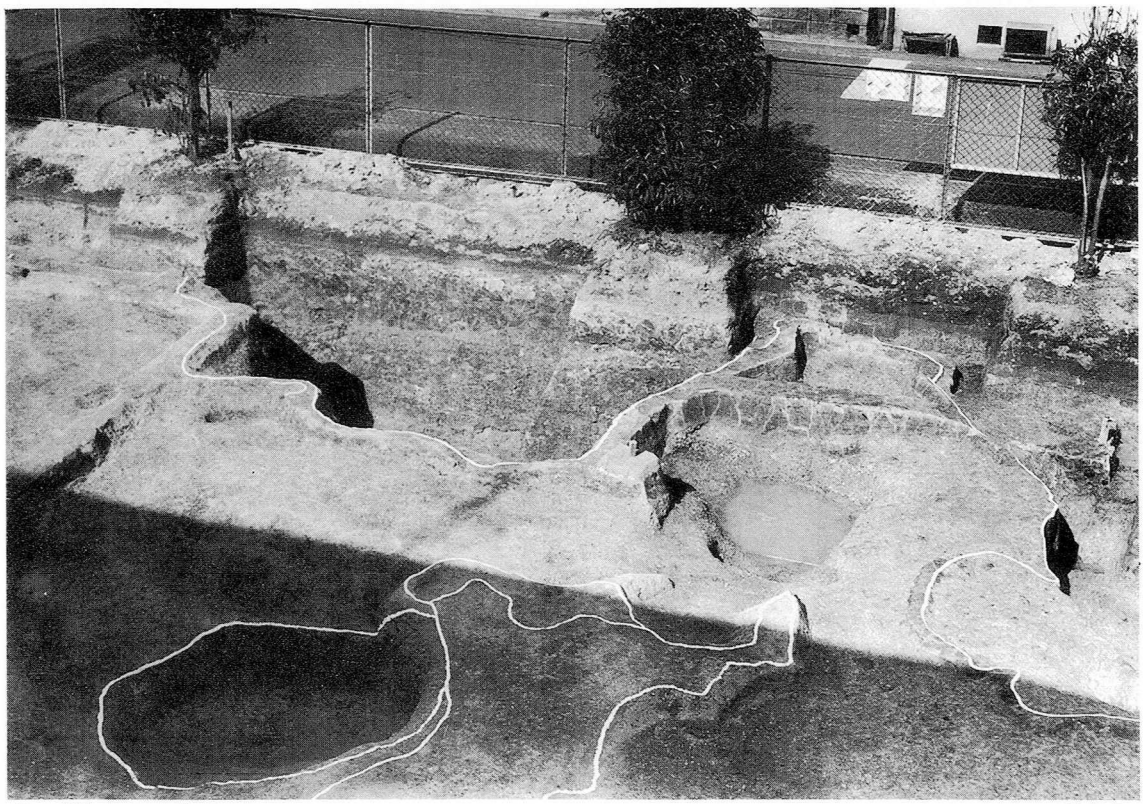


2．同　　上　　南より

図版5　検出遺構

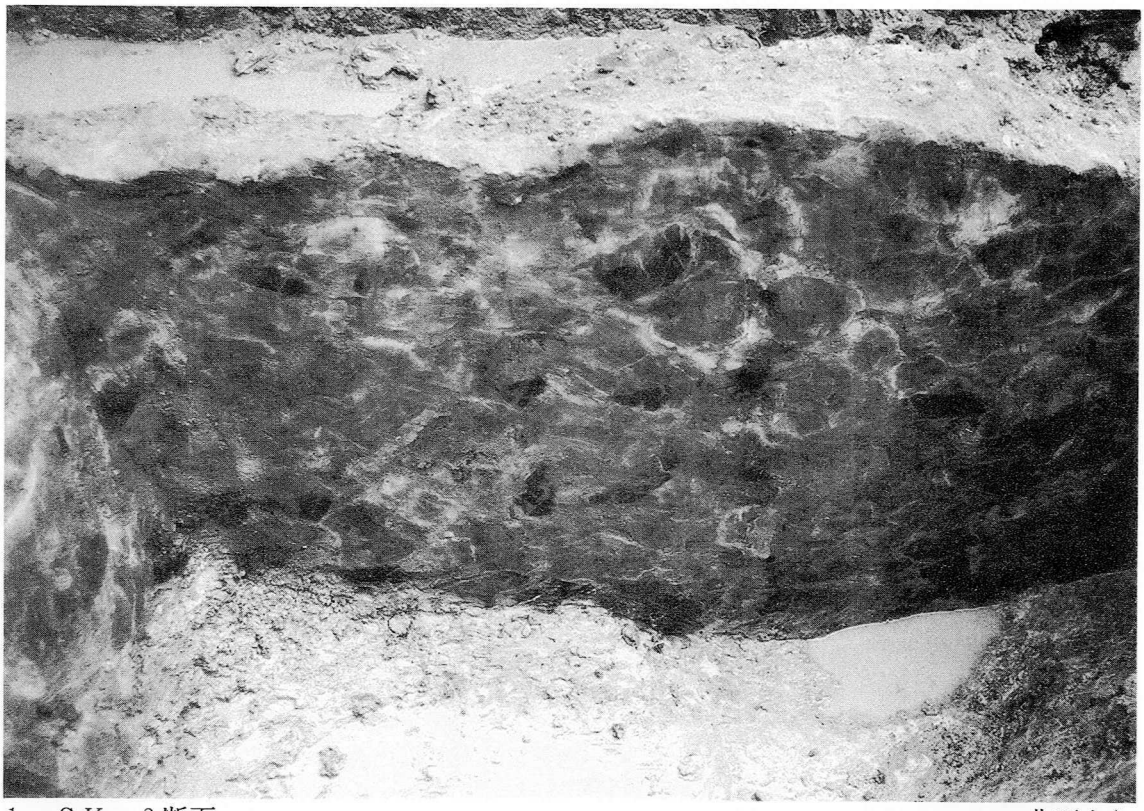


1．SK－2、3　　北西より

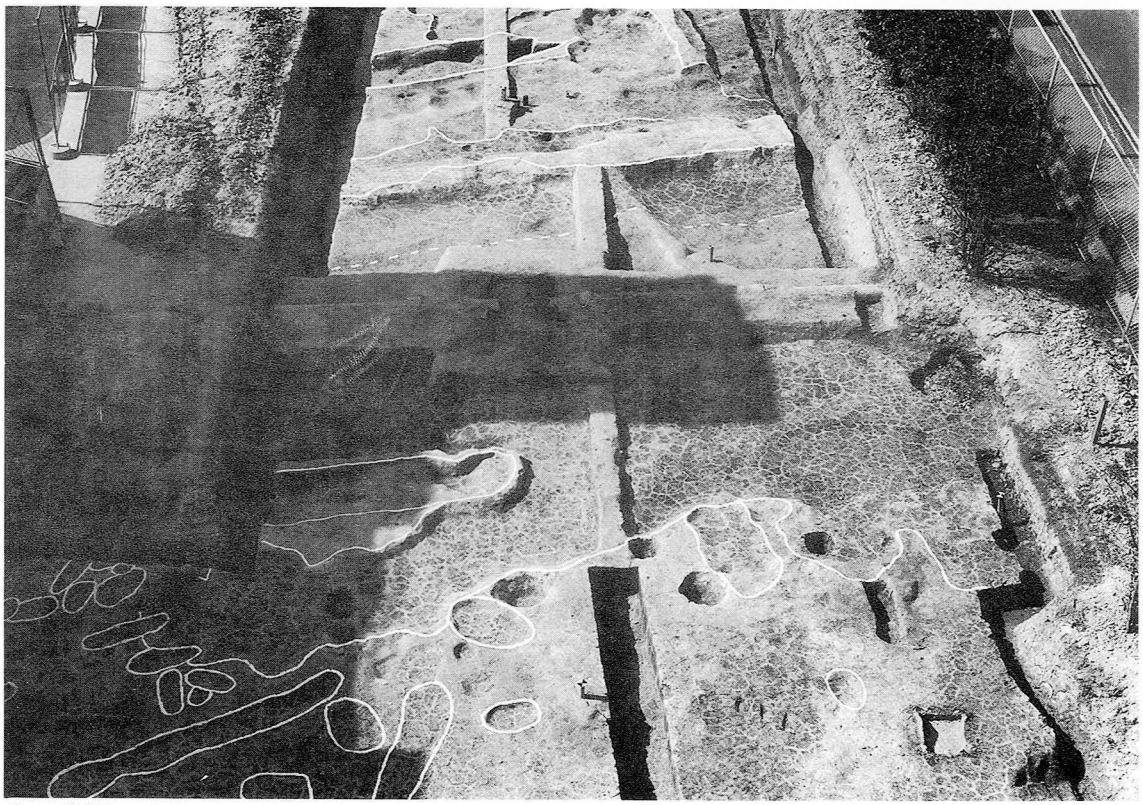


2．同　　上　　南より

図版6　検出遺構



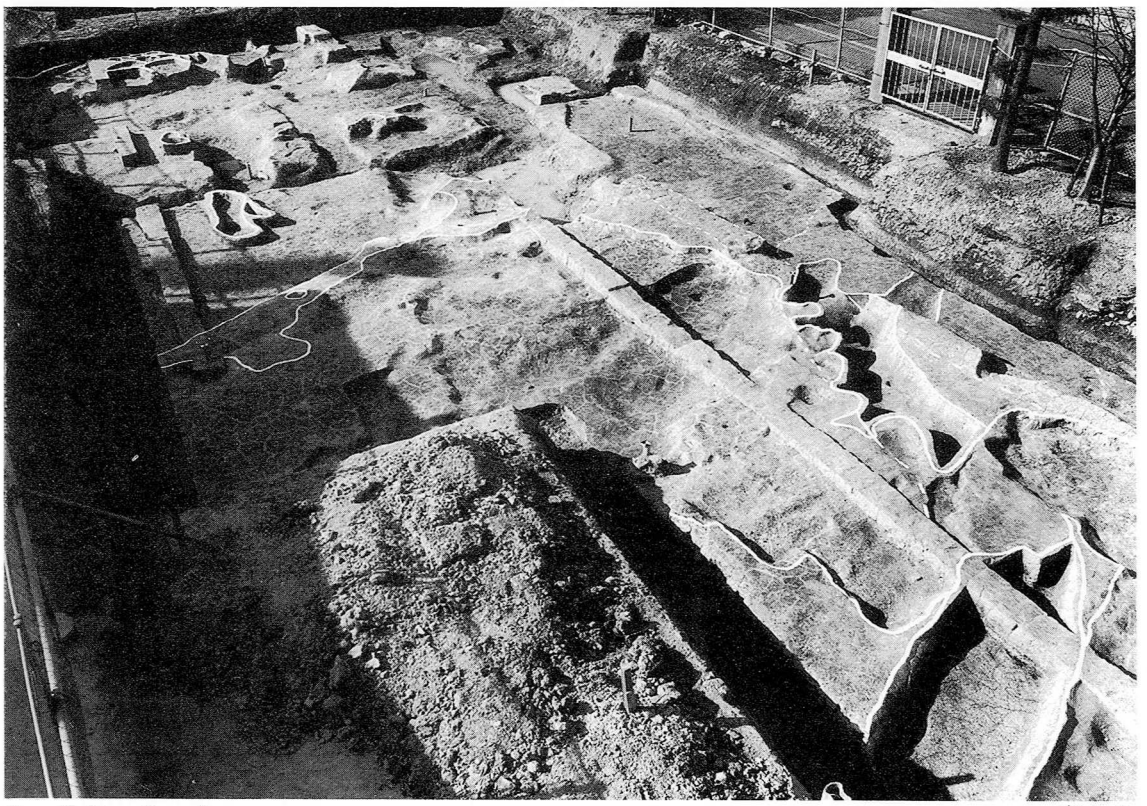
1．ＳＫ－３断面　　北西より



2．ＳＫ－４　　南東より

図版7　検出遺構

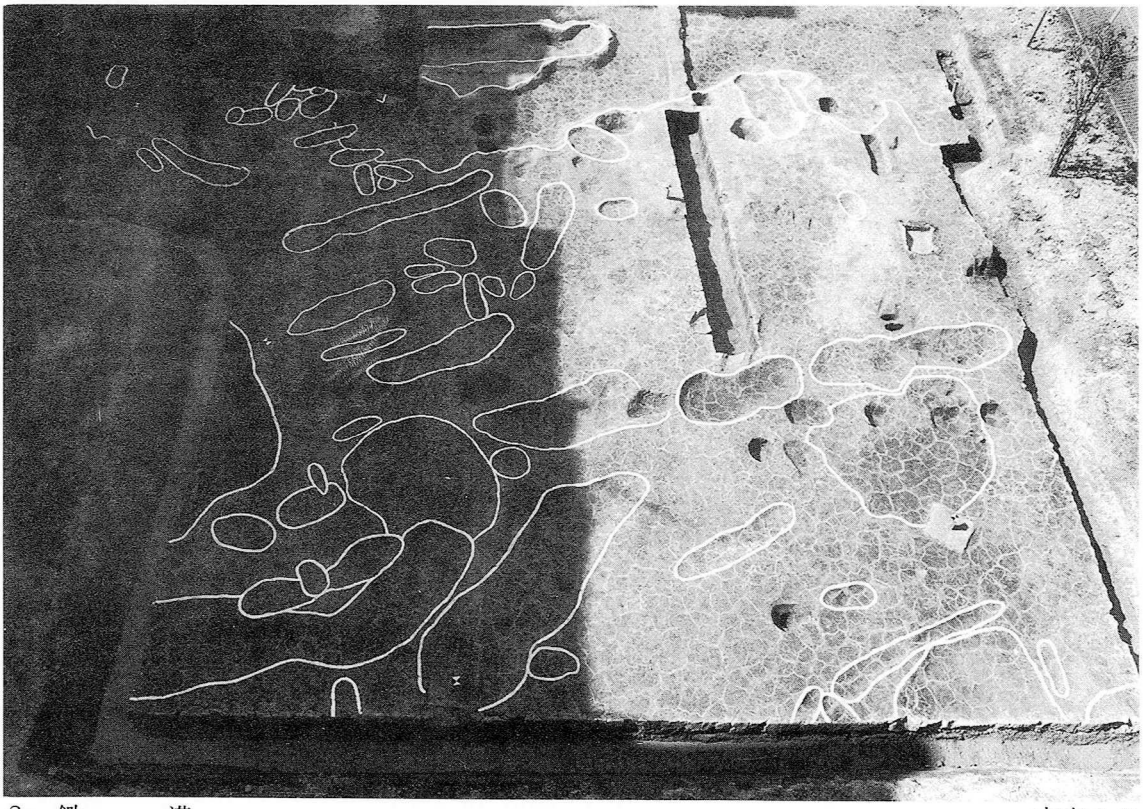
1．SK－5　　南より



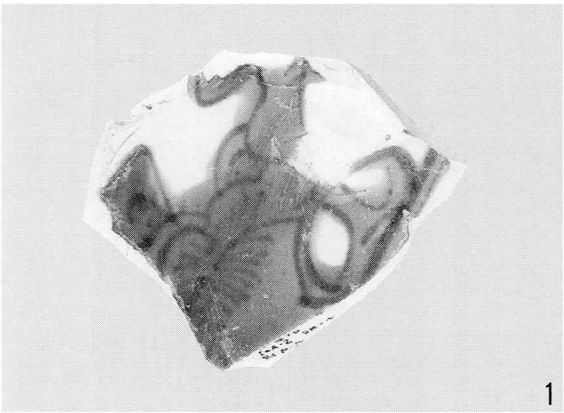
2．SK－5、6　　南より

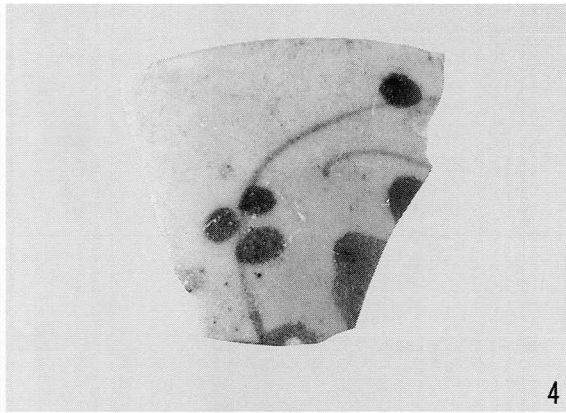
図版8　検出遺構

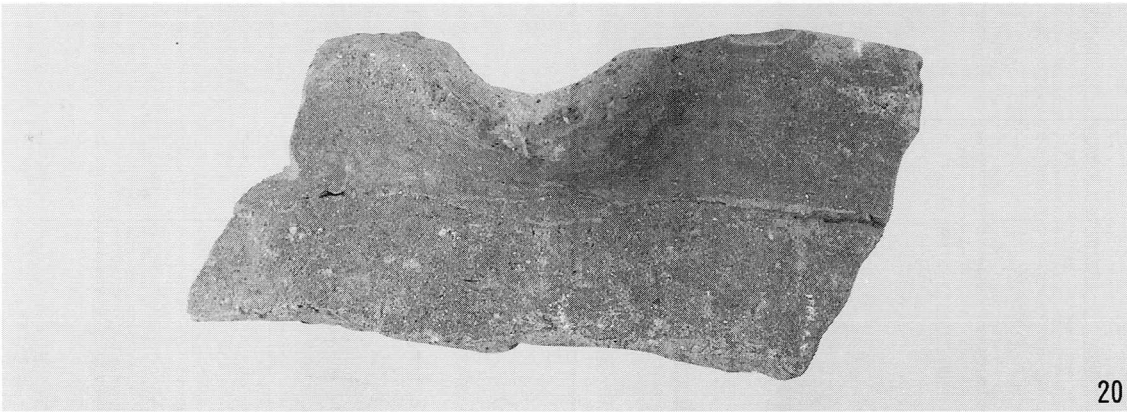
1．ＳＤ－13　　南より

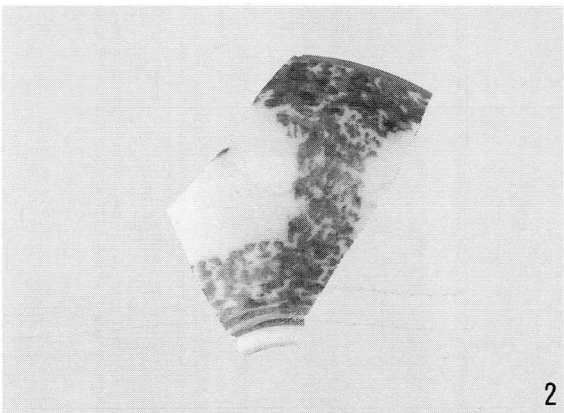


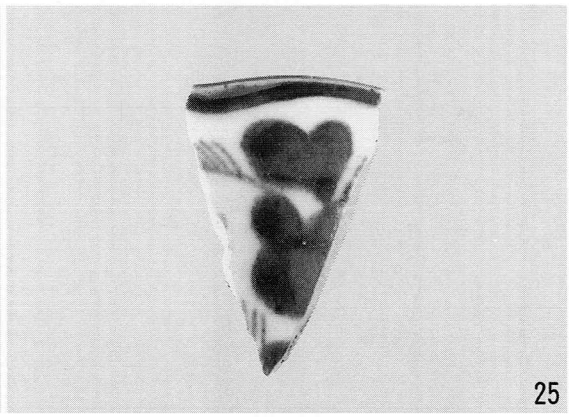
2．鋤　　溝　　南東より

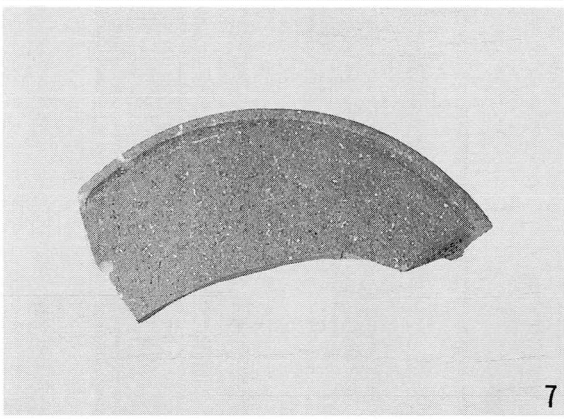


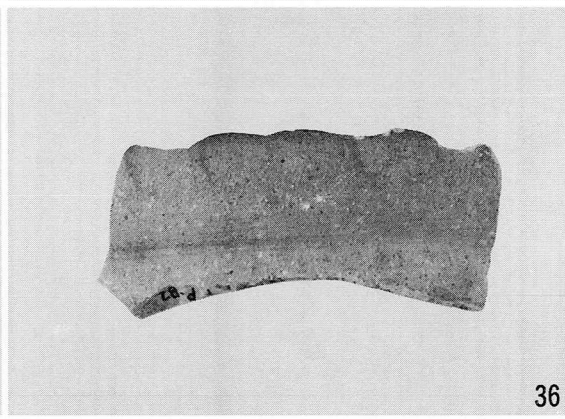




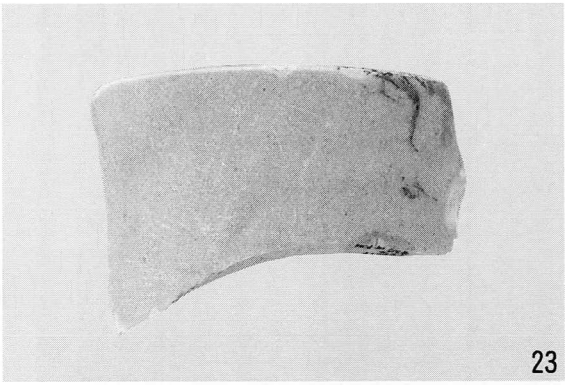


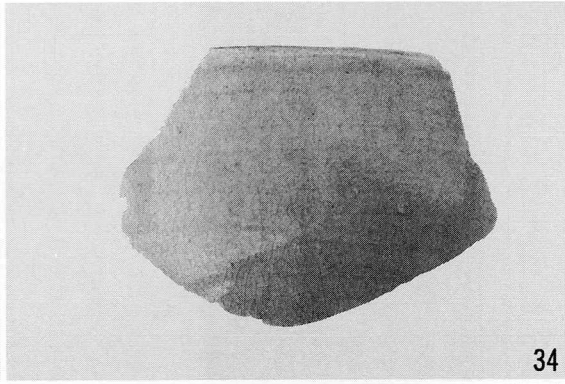


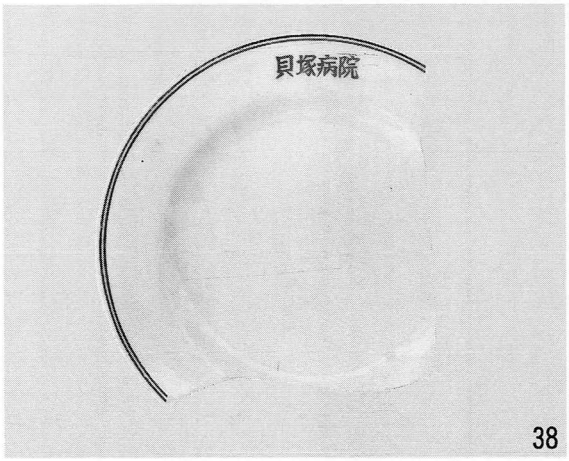


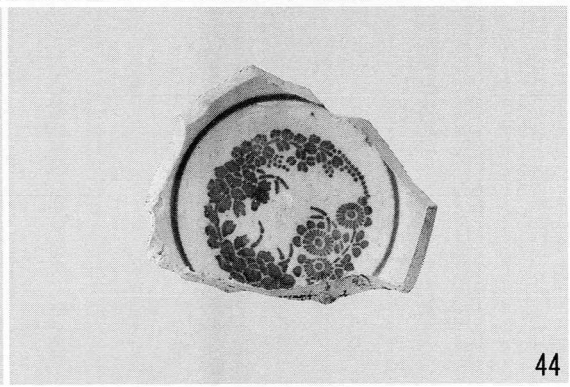


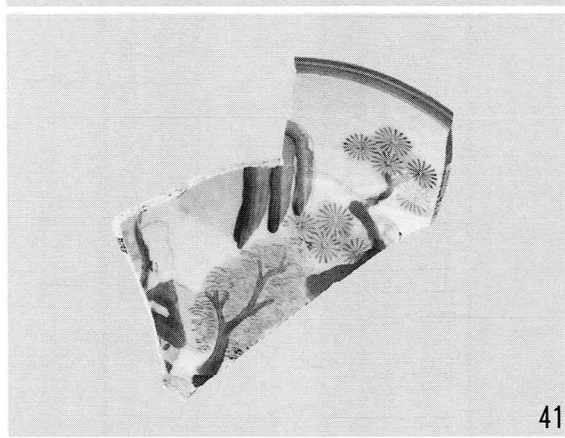
ＳＫ－４(１、２、４、７)、ＳＫ－６(20)、第３層(25、36)出土遺物











第3層(23、34)、第1層(38～42、44)出土遺物

貝塚市埋蔵文化財調査報告 第34集

津田遺跡発掘調査概要

発　行　日　　平成6年12月28日
編集・発行　　貝塚市教育委員会
　　大阪府貝塚市畠中1－17－1
印　　刷　　明　立　印　刷　所